



ラ

ム

ネ

菓

子

赤座典子



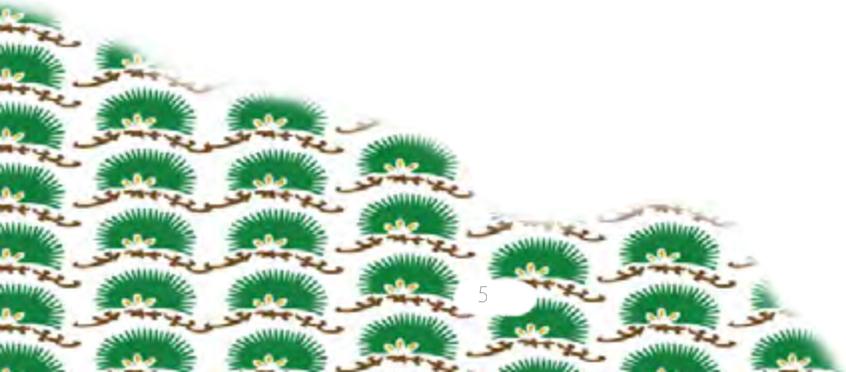
ラムネ菓子

赤座典子

あを創刊十周年記念句集

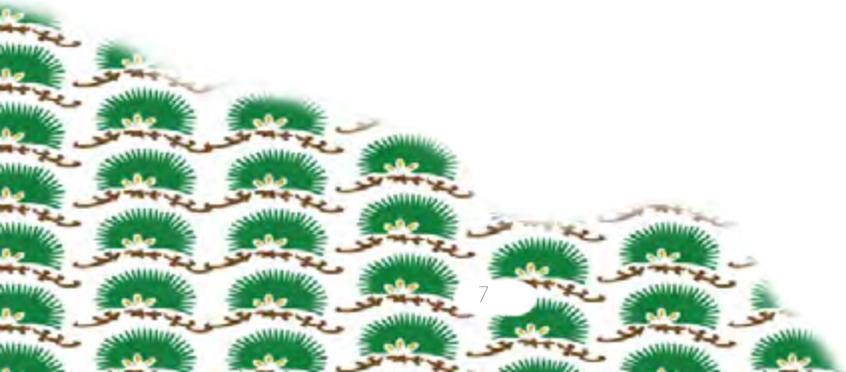
限定一部

紅梅を牛皮のごとく雪くるむ



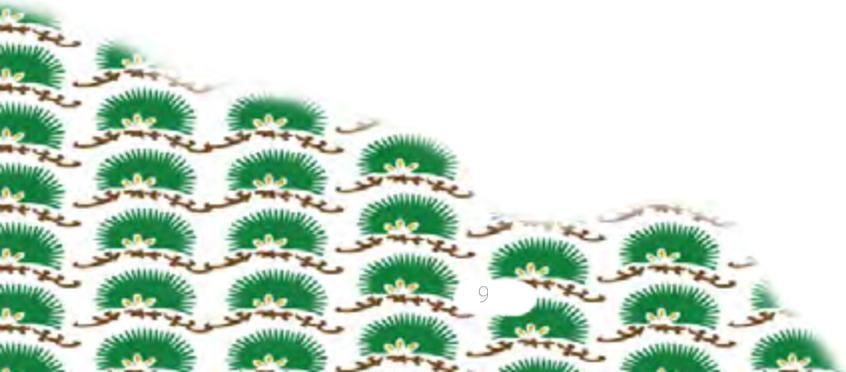
尾長きて背のへこみたる塀の猫

足摺の風に押されて椿道



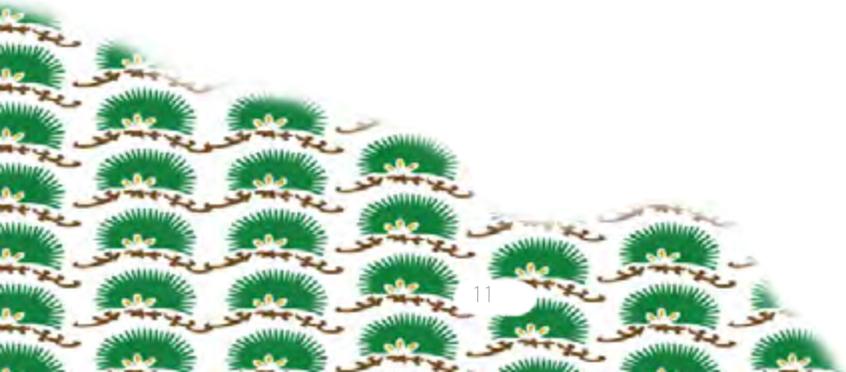
子雀のゆらして遊ぶ白木槿

一人ずつ大夕焼に寄り道す



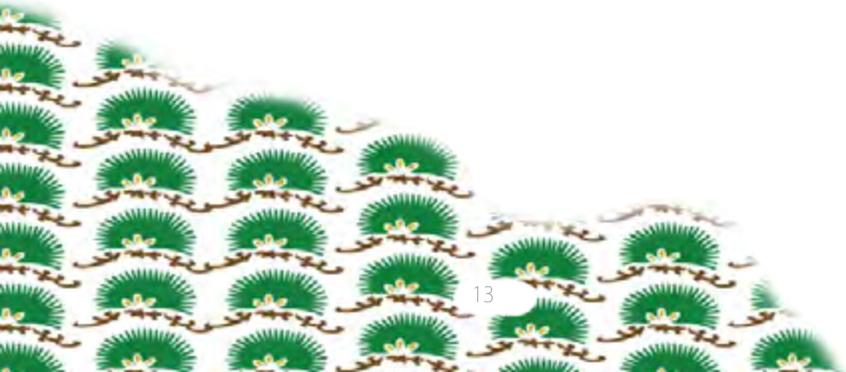
蠶螂の物干す吾にむきを変へ

長江の置燈台も初冬かな



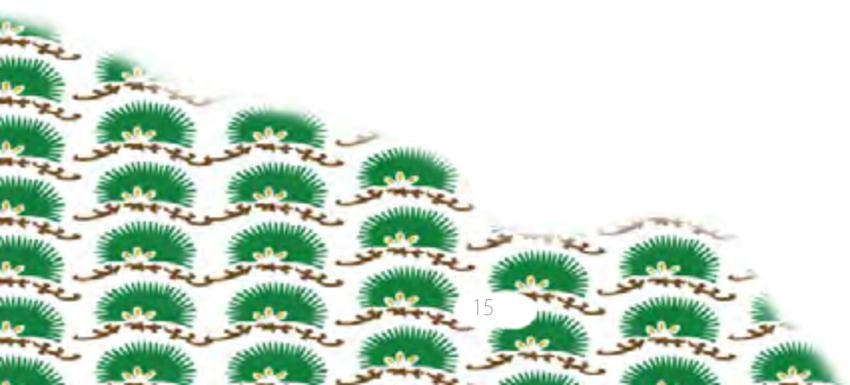
煮含めてよきことあらむ寒卵

けんけんと冬のホームで踏んでみる



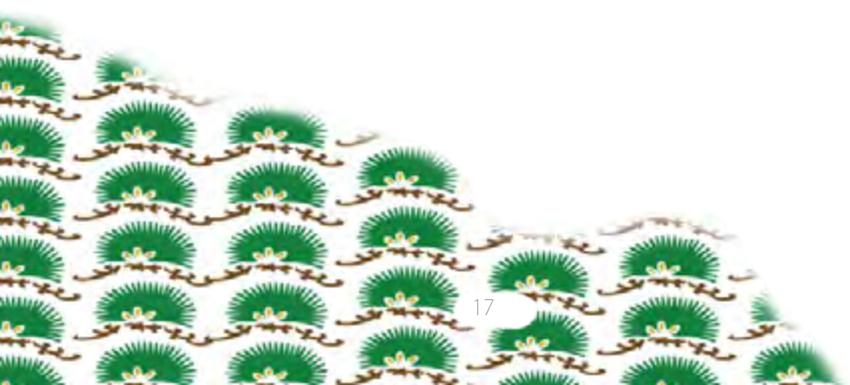
泣く姉の子守て耐へる冬の通夜

装はす貰ひ手つきし鯉のぼり



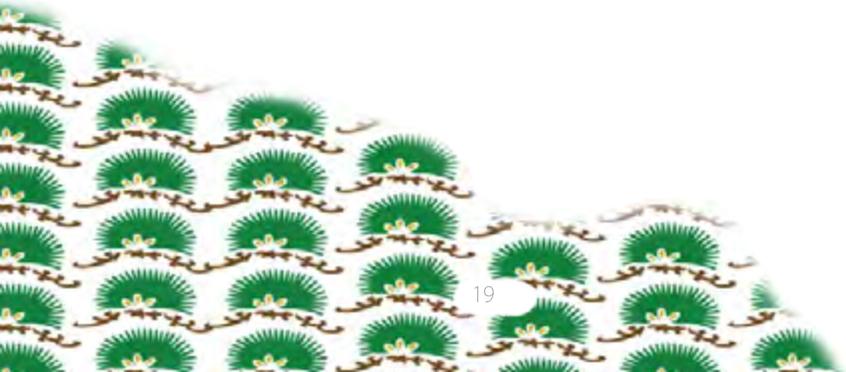
忽然と蝙蝠三日逗留す

ラムネ菓子マルセル石鹼カタン糸



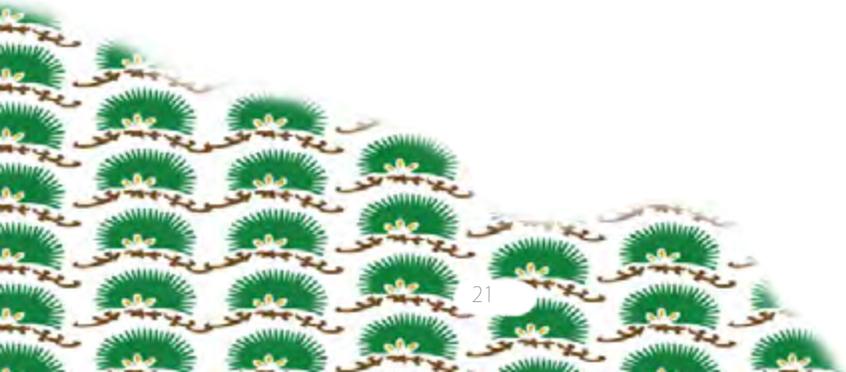
押し寄せて子を泣かせたり破れ昆布

白き腹見せて湯覗く夏つばめ



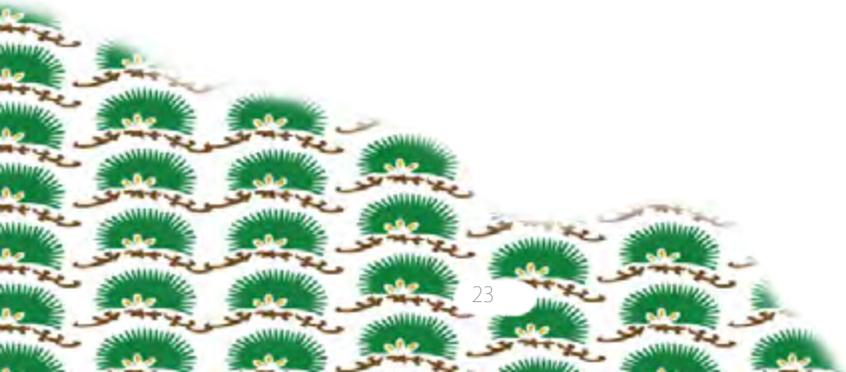
秋高しプラモデルめくエツフェル塔

鶏頭花いびつに吾を見下ろせり



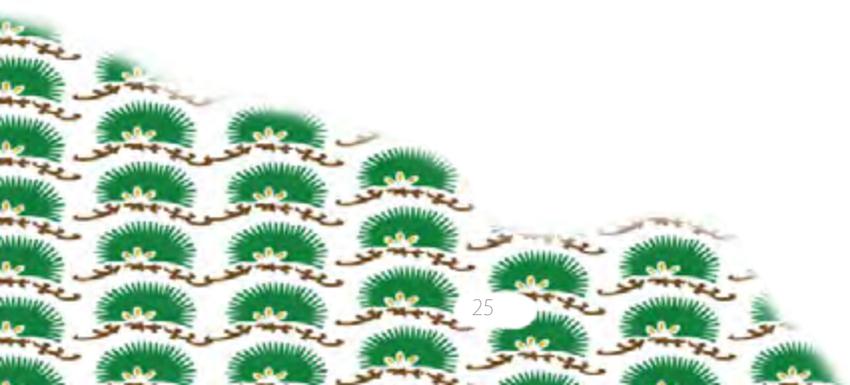
所在なしたった二つの烏瓜

木洩れ日よここに在ますと吉祥草



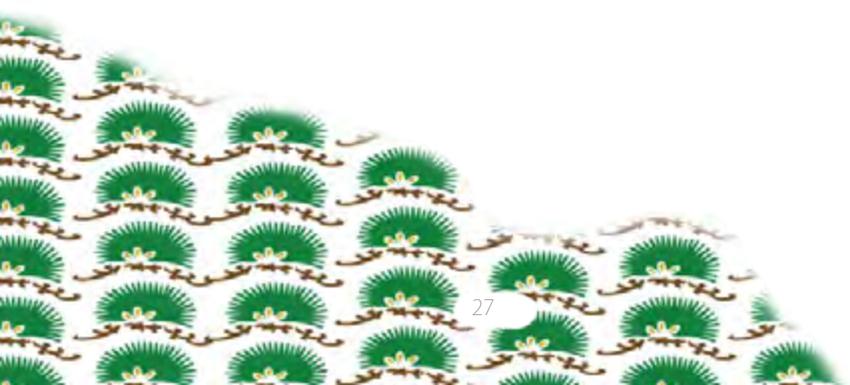
とりわけて皆の褒めたるごまめかな

幼顔見出す実さ家の初詣



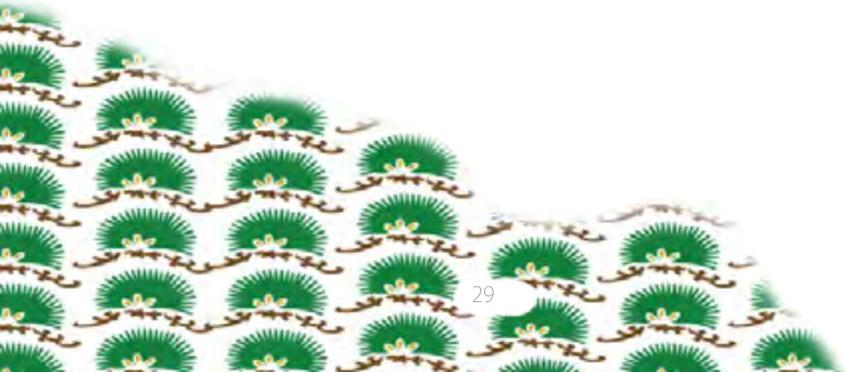
代筆を詫びる恩師の年賀状

謝辞述べる役終へし父春隣



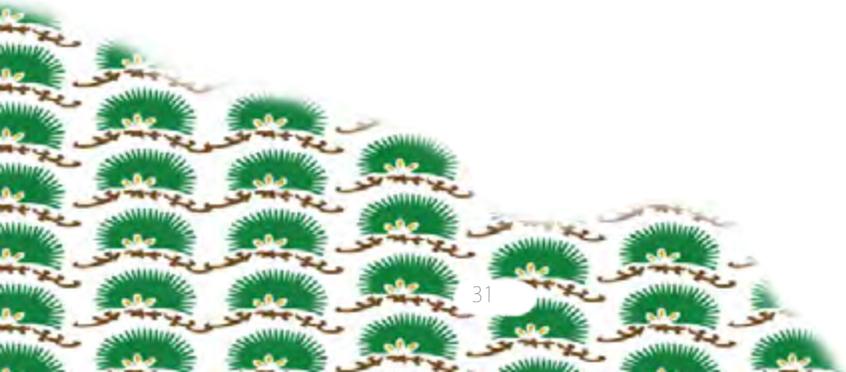
少しだけ安堵の思ひ冬林檎

寒き世に小さき祝ごと有難し



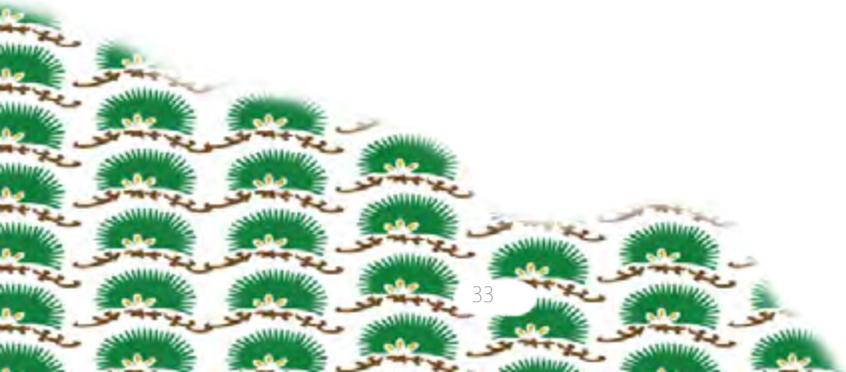
云はれればさうともみえし緑梅

常ならず堺のまちの春
北ならひ風



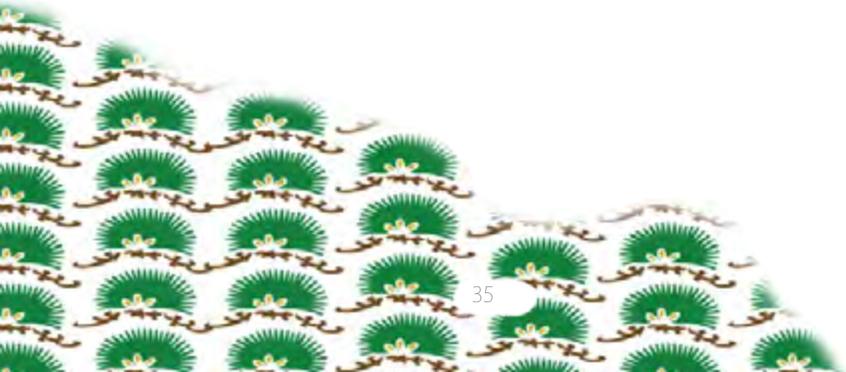
夏
菊
や
栄
し
国
の
石
畳

匂
ひ
た
つ
と
べ
ら
の
花
に
引
き
返
す



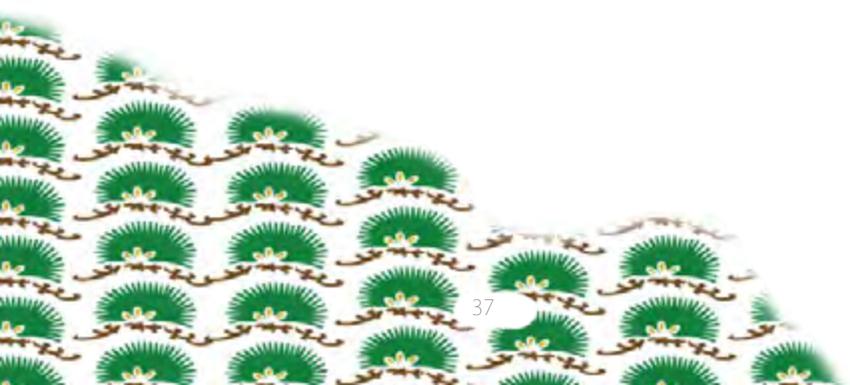
尼
僧
院
開
門
遅
し
鉄
線
花

ふ
る
さ
と
を
語
る
珊
瑚
や
金
魚
鉢



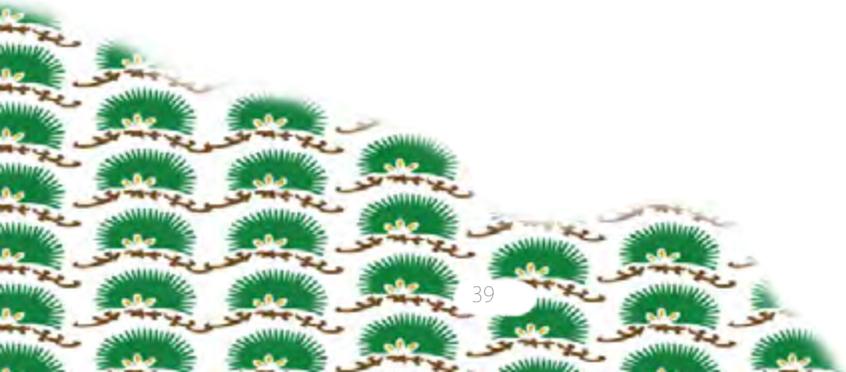
日盛りや師より覚悟の遺稿集

尺八の音とぎれけり花茨



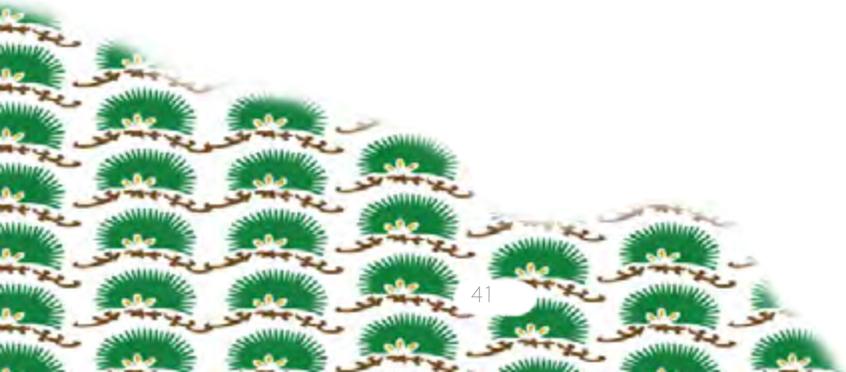
凌霄の花を落して鶉遊ぶ

人
の
間
あ
を
き
香
り
の
鬼
灯
市



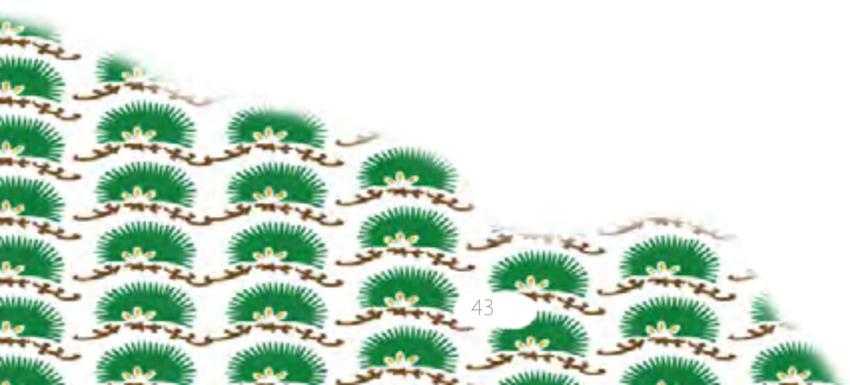
手灯りにすいと螢の好奇心

かこひたる掌にふれずして舞ふ螢



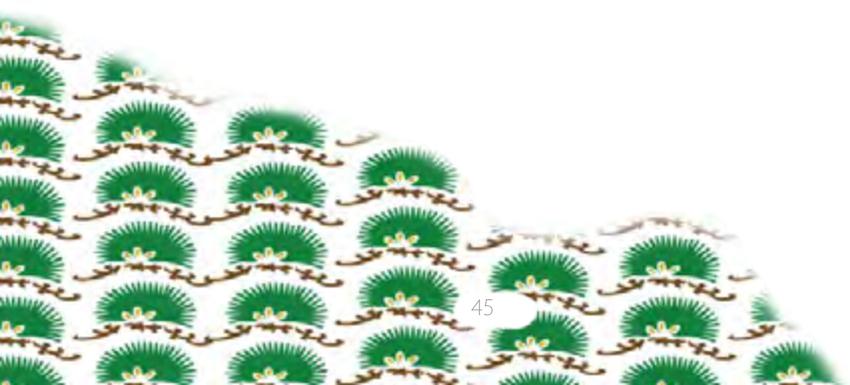
黄緑の稲穂そろひて天を指す

おとがひの赤き紐過ぐ風の盆



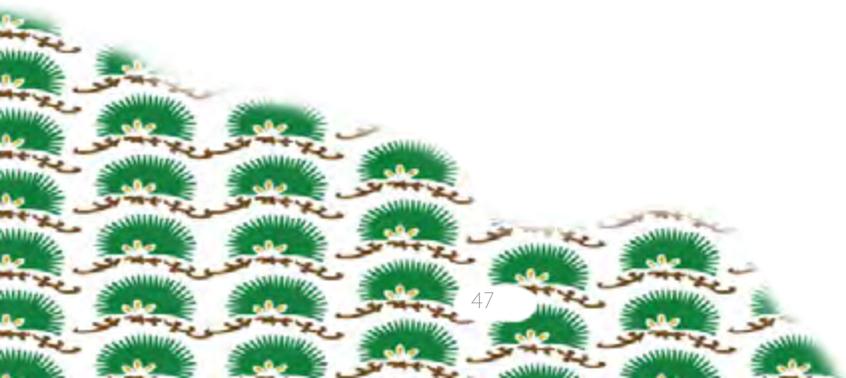
室の花待合室の手話母子

待つほどに白蝶貝の後の月



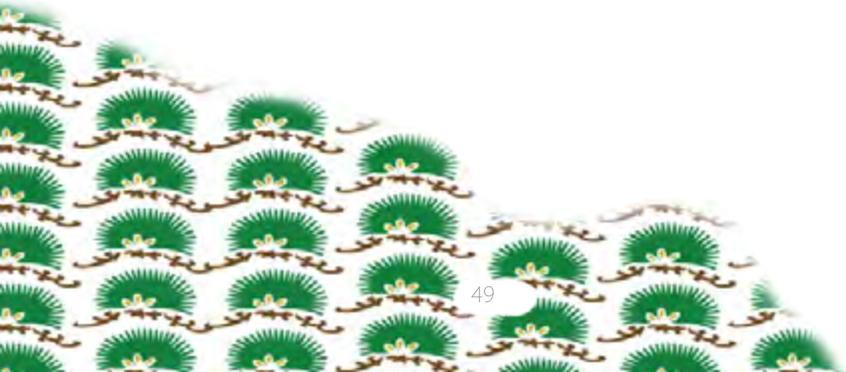
朝寒の手の甲からの目覚めかな

熟るるを待つ土塊めけるラ・フランス



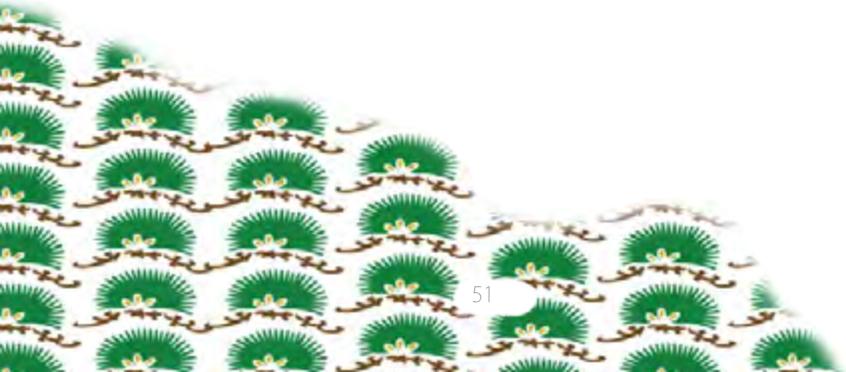
白菜のたがひちがひや塀の上

冬うららいなせピアスの植木職



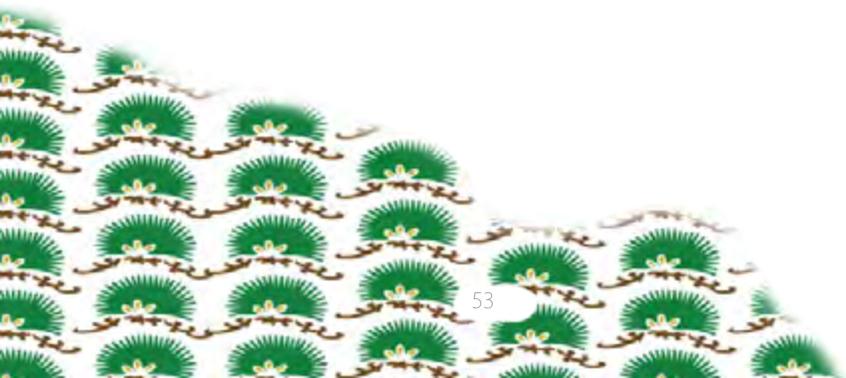
友のまた勤めてをりぬ初芝居

雛の日信濃の人の訃音あり



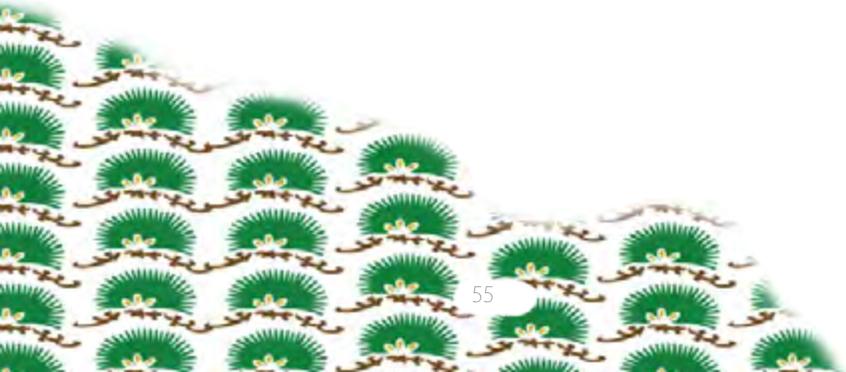
春
昼
や
信
号
を
待
つ
耕
耘
機

水
温
み
声
高
に
人
往
き
か
へ
り



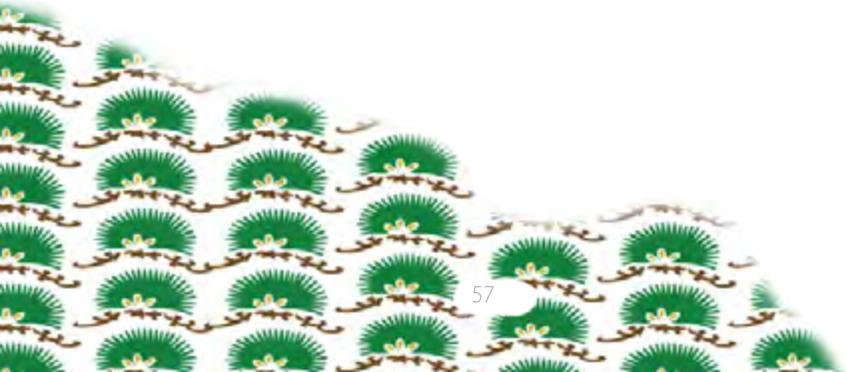
柳絮とぶ上高地にも北京にも

菜の花や利根東遷の昔より



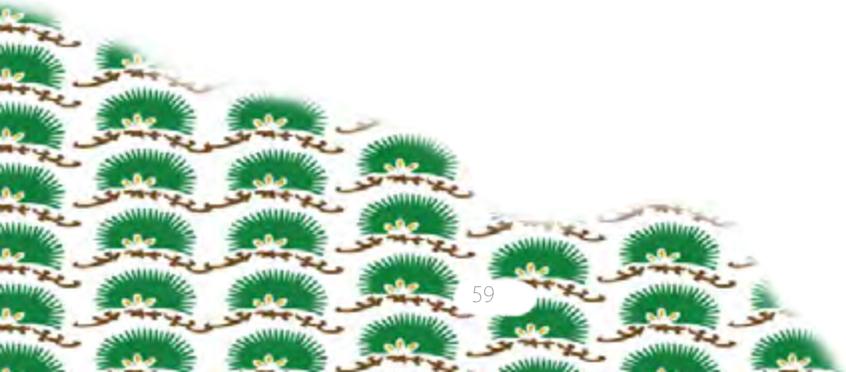
突
然
に
半
袖
の
街
雀
の
子

花
菜
風
利
根
川
橋
は
県
境



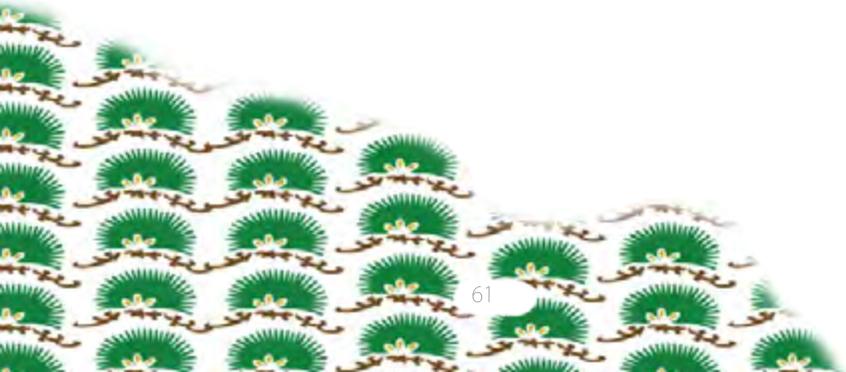
ときいろの毛玉もこもこ小白鳥

旅で得し羅はや、眩しかり



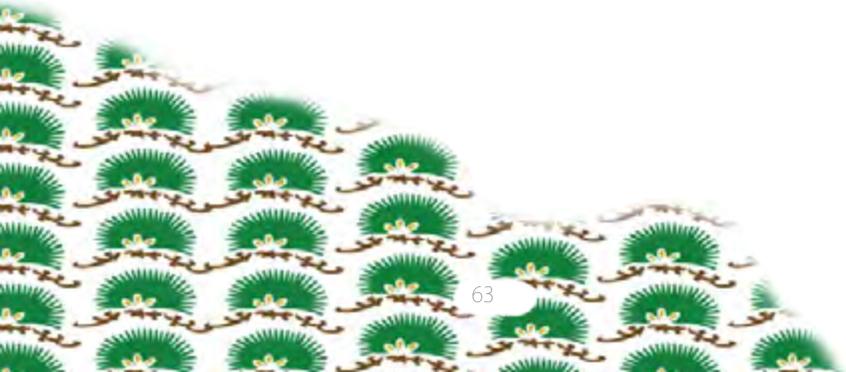
釣
忍
友
が
大
好
き
の
ど
自
慢

ハ
ツ
ピ
ー
と
呼
ば
れ
る
猫
と
月
を
待
つ



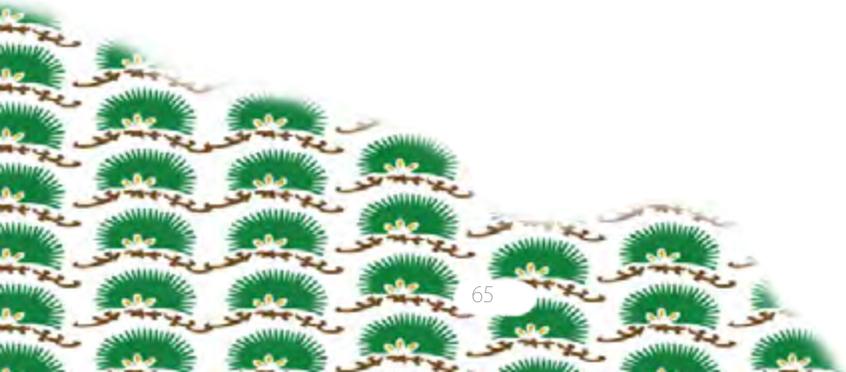
忠
犬
と
二
人
の
山
荘
水
澄
め
る

滴
り
や
錆
色
岩
に
玉
簾



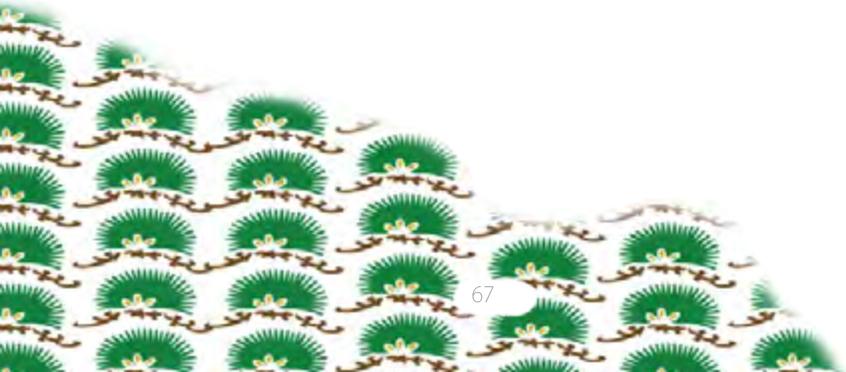
コスモスの自在にかこむ蓼科湖

錦木の鱗を剥きつつバスを待つ



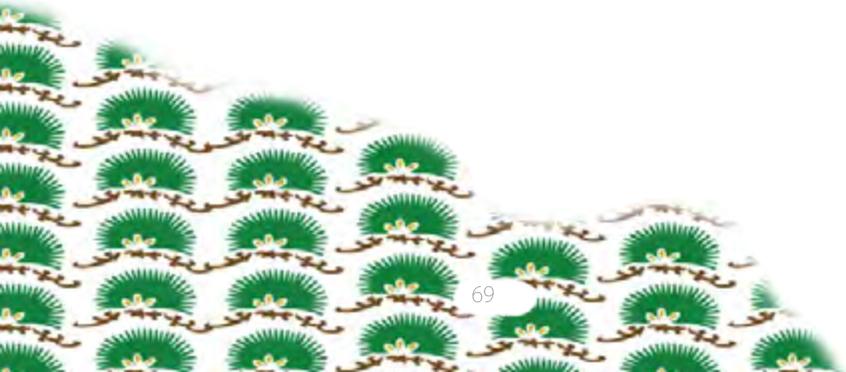
ゴンドラの風舞ひ落す櫛紅葉

臆たけし人の遺影は微笑まず



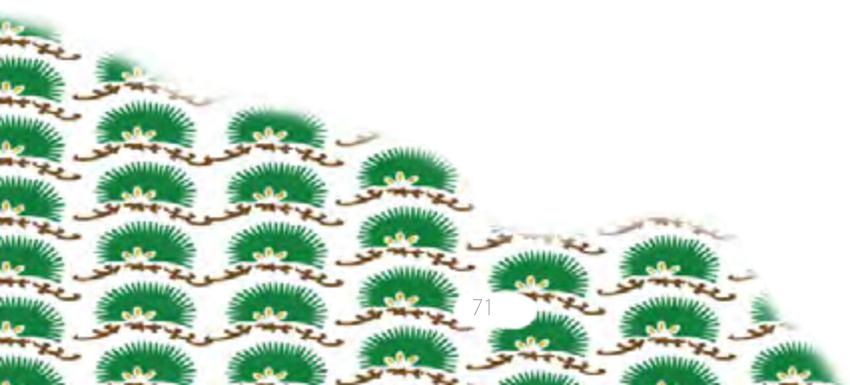
尾のはねる懸大根の白さかな

大雪の校庭の子ら柔道着



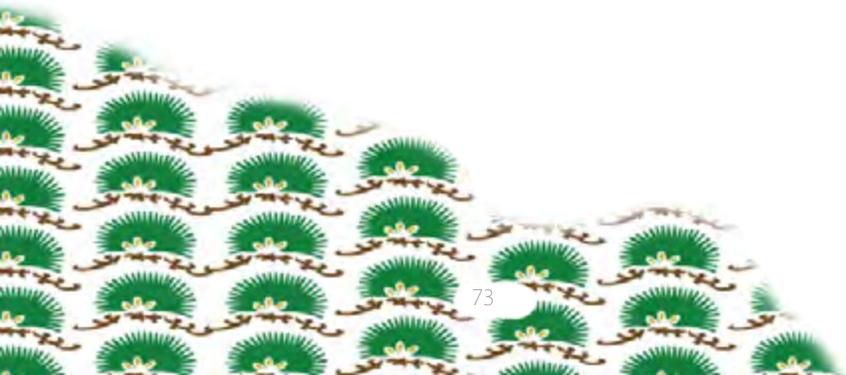
ジ
ョ
ン
・
レ
ノ
ン
と
友
の
命
日
開
戦
日

石
露
枯
る
る
石
見
の
人
の
記
念
館



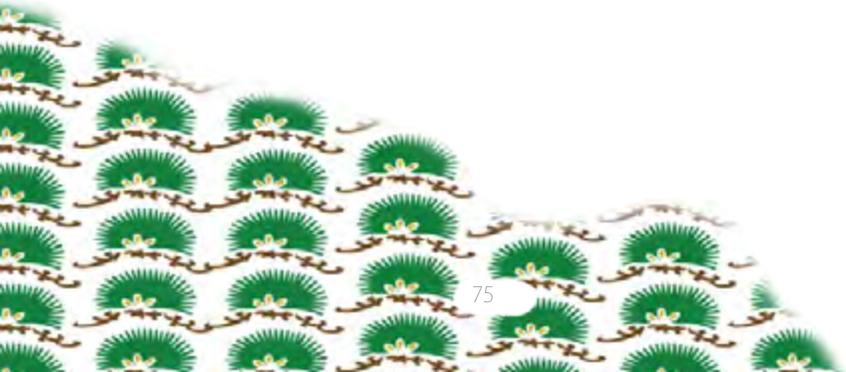
竹
林
か
ら
石
州
瓦
へ
冬
日
射

漆
黒
に
二
日
の
富
士
の
鎮
ま
り
ぬ



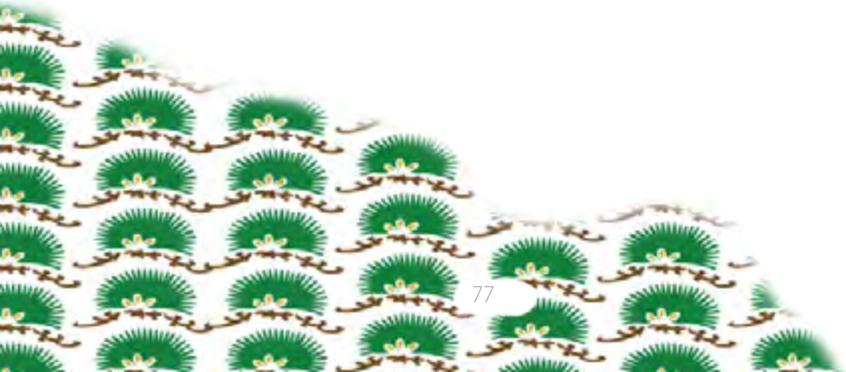
箱根駅伝舞ふ粉雪の大写し

冬日向紐のばしきり犬眠る



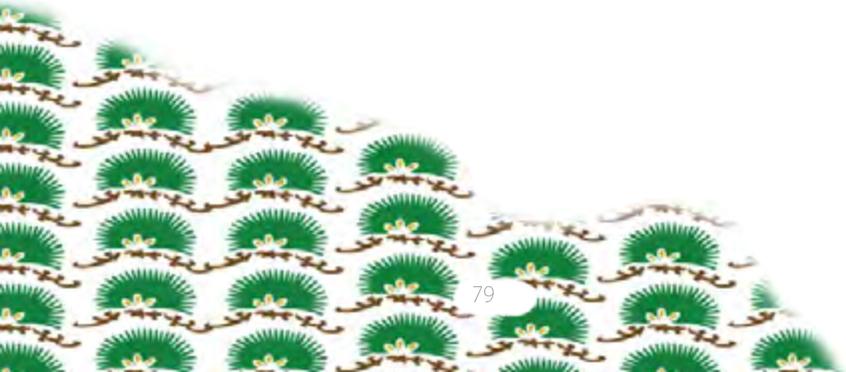
春光に淡き雀斑水上バス

探偵の折り込み広告春炬燵



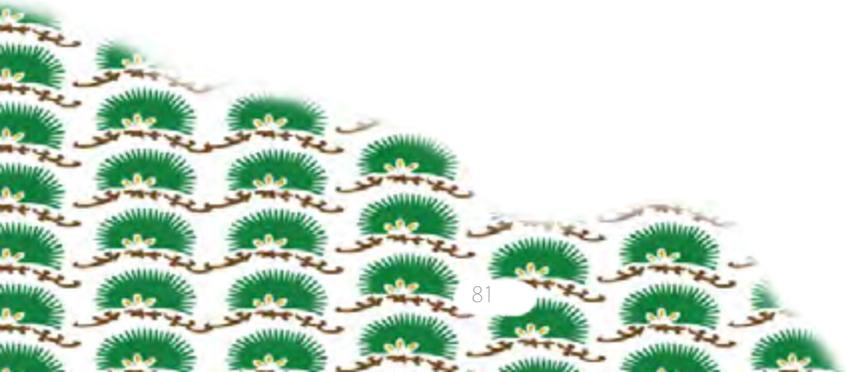
独活のぬた子の遠慮せしふたむかし

三年は永し短し柳の芽



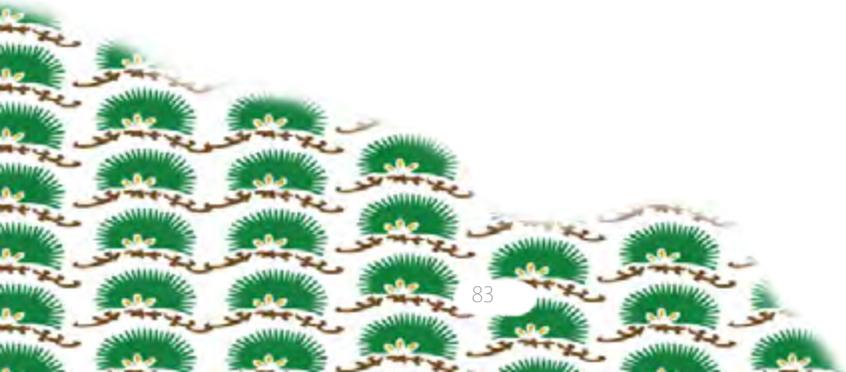
此処だけの話とはしやぐ螢鳥賊

湯治宿山菜御膳青葉木菟



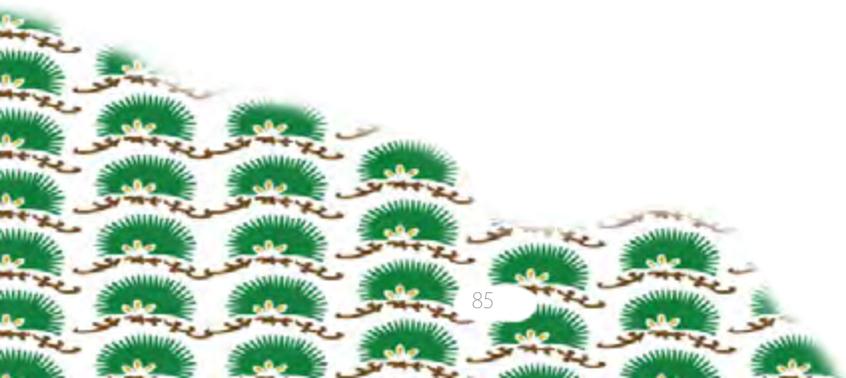
ビル群の裾新緑の染め分ける

ヴェネチアの金魚は玻璃につくねんと



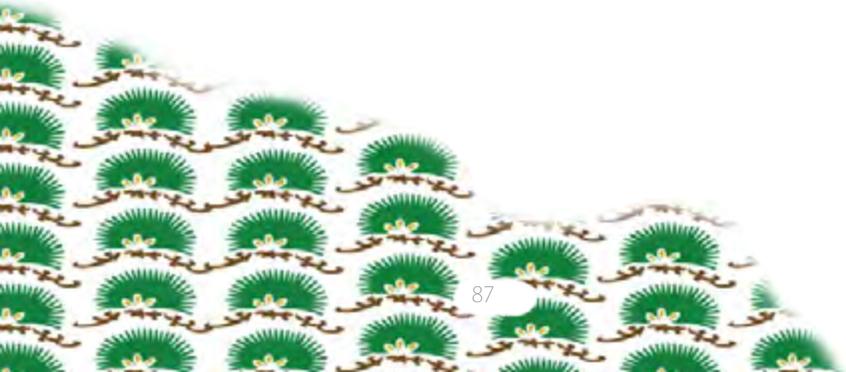
石段の影うすれつつ
つつ広島忌

大声でいただきますと
赤のまま



秋
の
辻
研
屋
残
せ
し
水
溜
り

マ
ア
ロ
ン
と
焼
栗
売
の
節
回
し

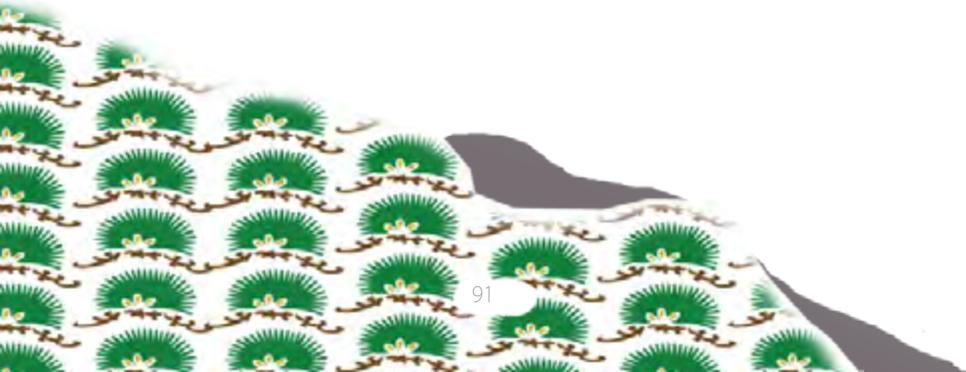




2
2004 ~ 2005

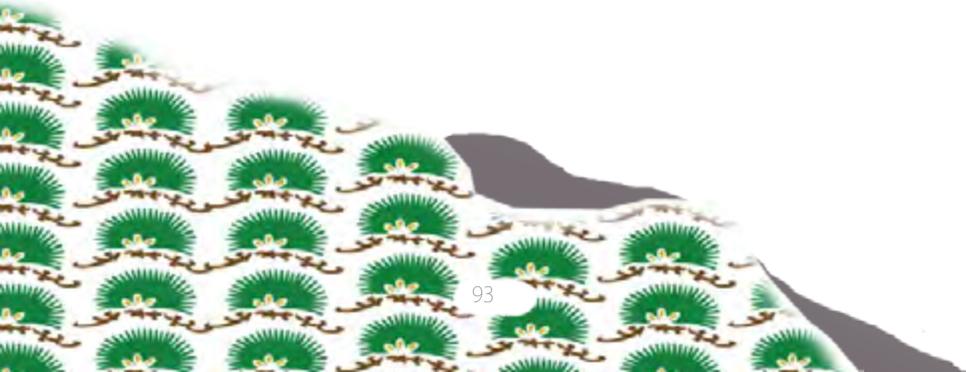
E・Tの顔そのままの蓮あり

初孫といふ銘の酒を歳暮とす



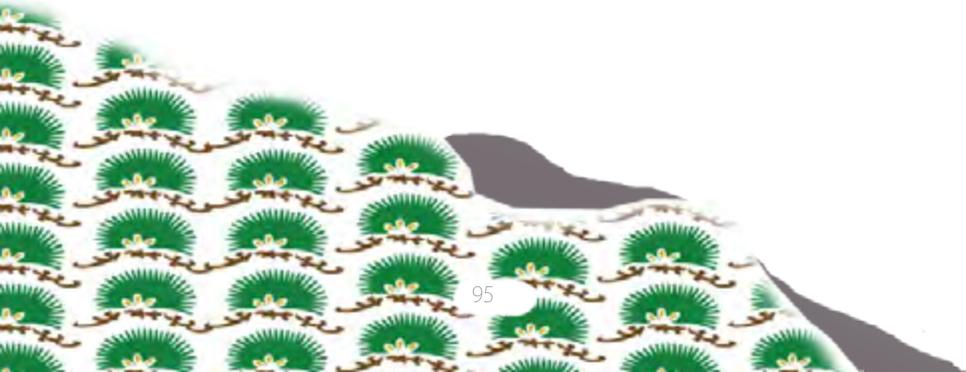
合唱付第九は冬の季語ならむ

いつの世や与謝野晶子の日向ぼこ



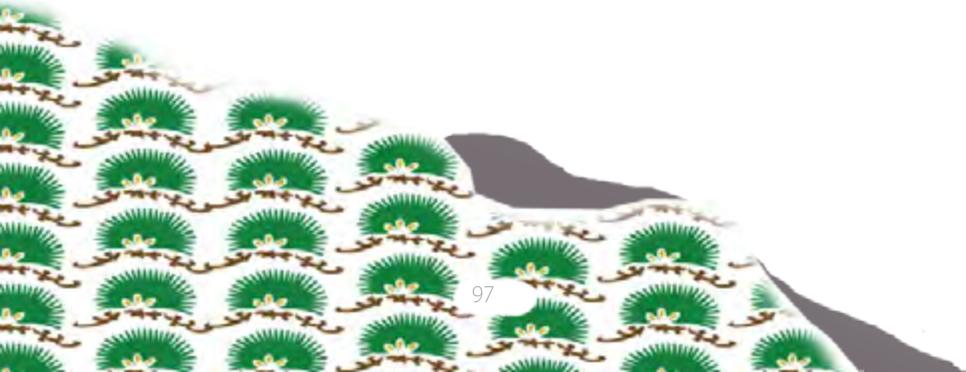
ほつこりと底ひ見せたる冬椿

とりあへず背筋伸ばさむ今朝の春



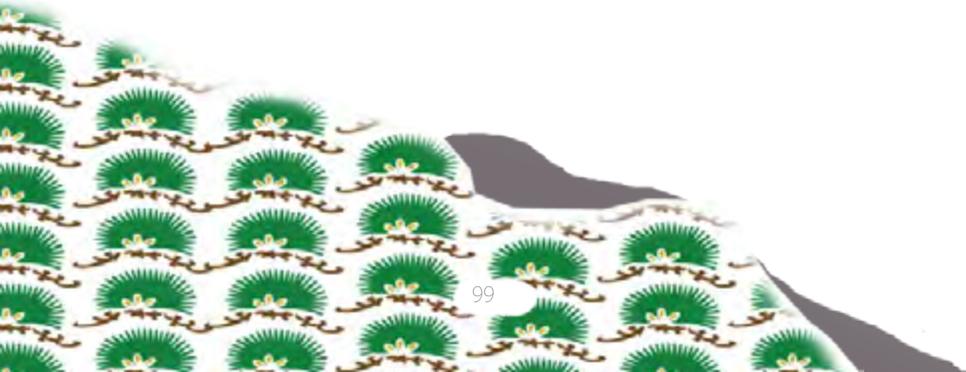
かたくなにいつもコーヒー大旦

祝日の合はぬ異国の初曆



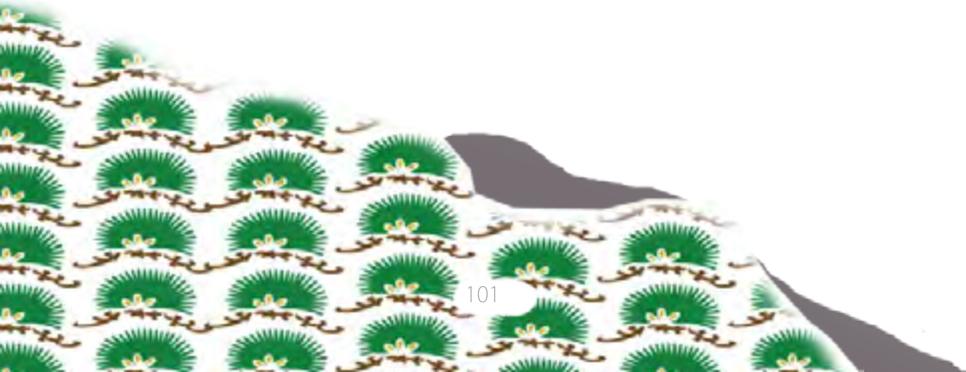
スナツクの仕舞屋となる猫の恋

春寒やアルチザンめくヴェスト着て



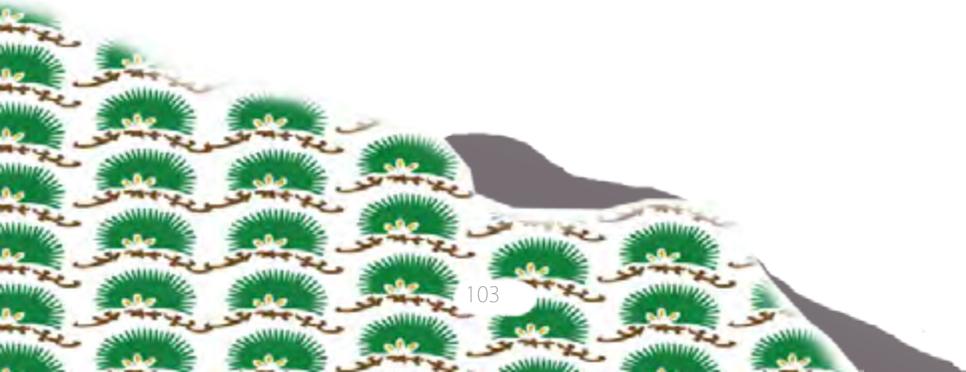
朝食のラ・カンパネラ
葛苴割く

ぶかぶかの帽子と靴で
花堤



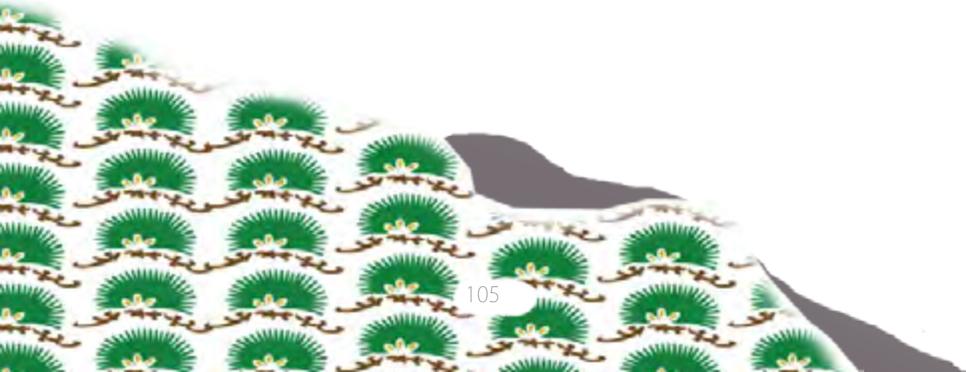
囀
や
制
服
の
丈
短
く
て

底
見
え
ぬ
釣
堀
の
水
春
の
水



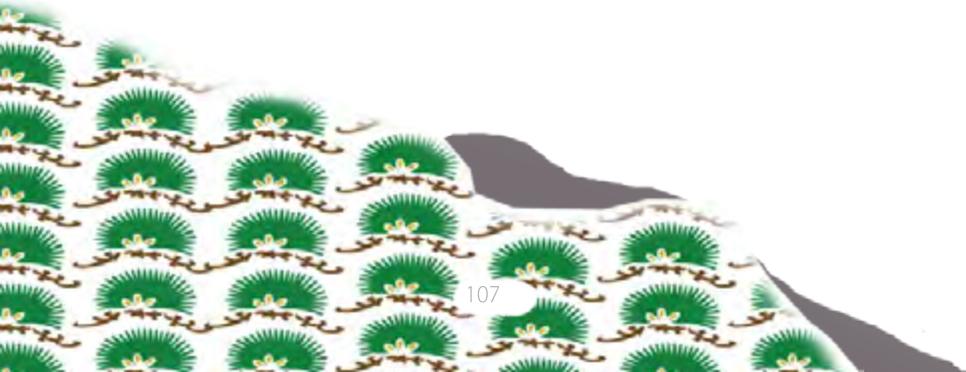
春の海母の耳鳴りやはらぎぬ

いつの世も踏切際の夏帽子



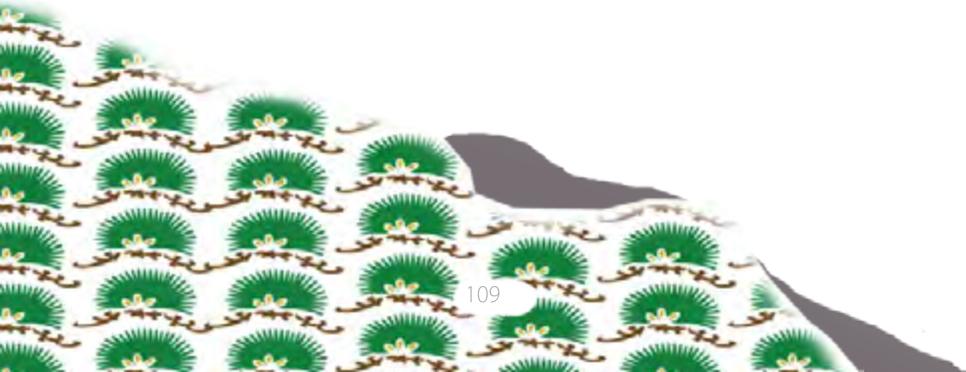
念願の小梨満開上高地

マイヨールのトルソ沈める夕河鹿

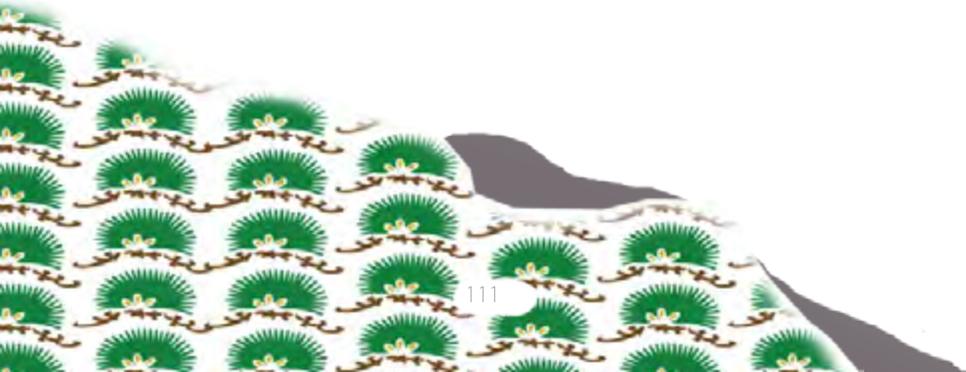


小動物となりてみてゐる入道雲

朝焼の消ゆガムランの響き初む



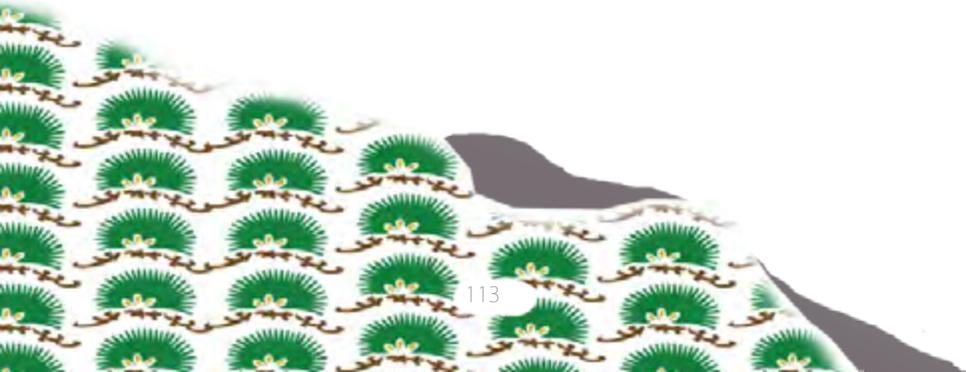
緑
さ
す
島
の
棚
田
は
三
期
作



田
搔
牛
仔
は
親
の
そば
離
れ
ず
に

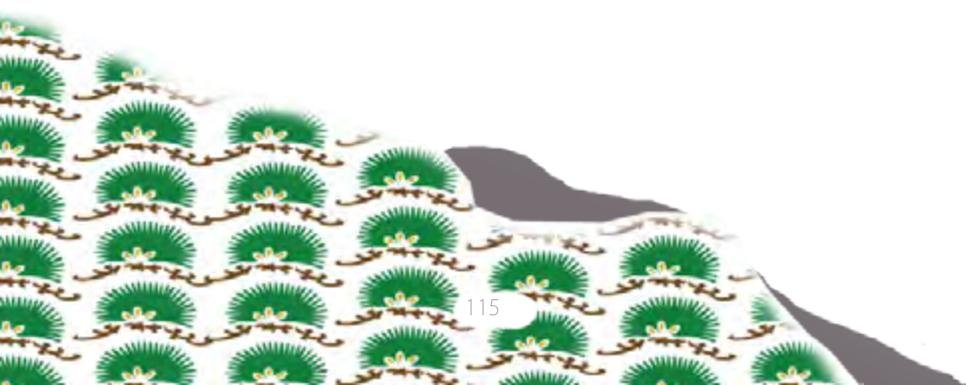
三毛猫に餌せがまれし端居かな

溪谷の合歓向き合ひて紅を刷く



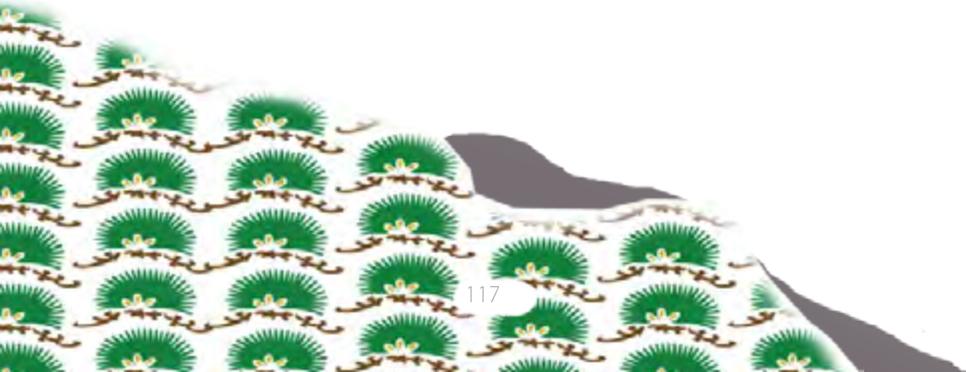
新蕎麦と熱き蕎麦湯と能書きと

図書館とプールへ行きし秋立つ日



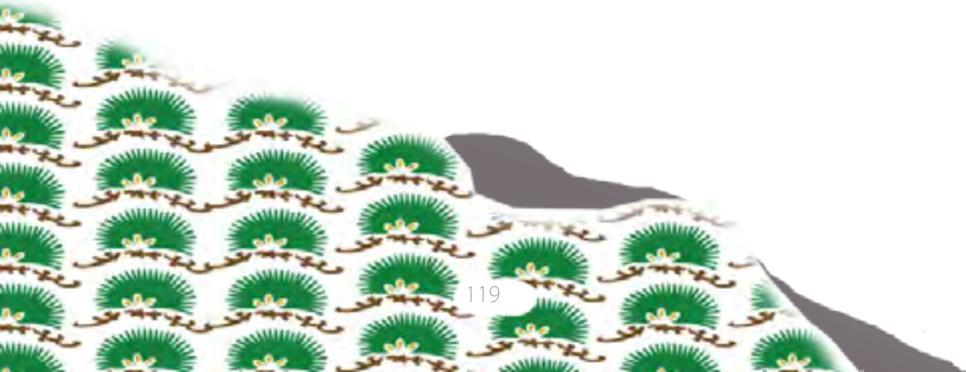
拍手聞こゆアテネ五輪の長き夜

山腹に小山のやうな昼寝熊



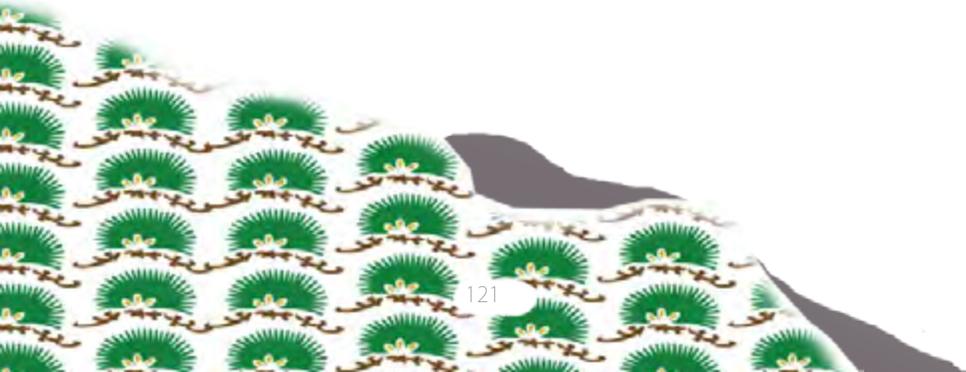
轍
め
く
氷
河
擦
痕
天
高
し

ビ
ー
バ
ー
の
大
枝
運
ぶ
水
澄
め
り



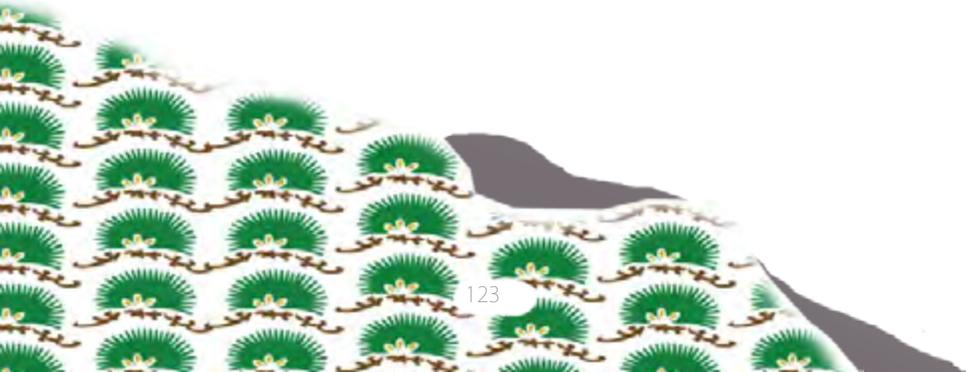
初雪や砂糖菓子めく赤き岩

白き腹の鮭漂へり川臭ふ



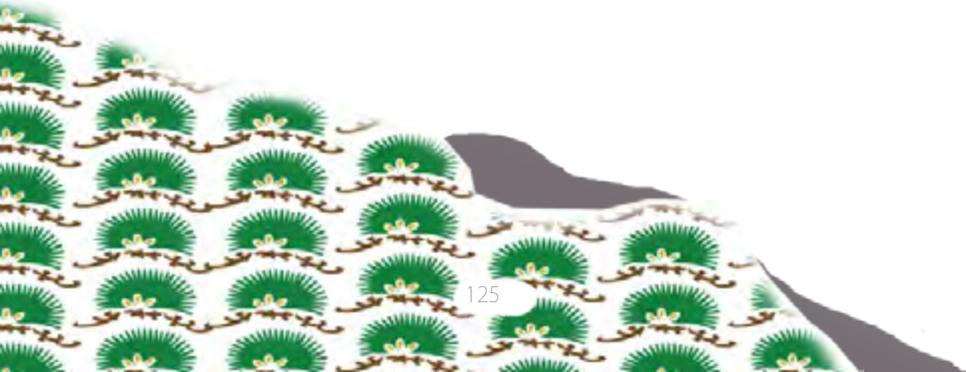
冬景色俯瞰してをり見舞客

贈られしトルコ桔梗の透けるあを



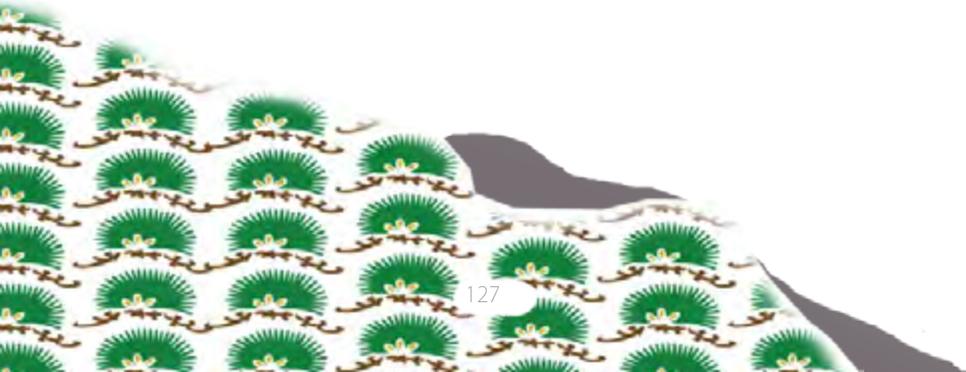
虫の声聞き分けられぬ町育ち

渡り鳥遠回りでも己が道



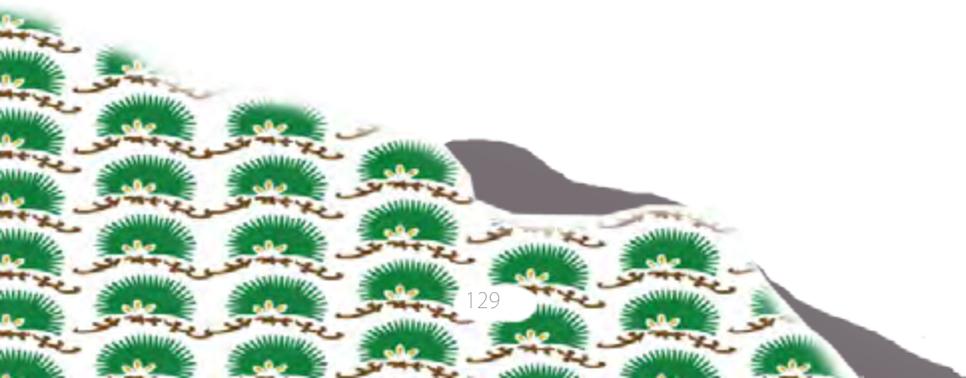
団栗を踏みつ見廻猫の来る

名をつけし野良猫の膝日向ぼこ



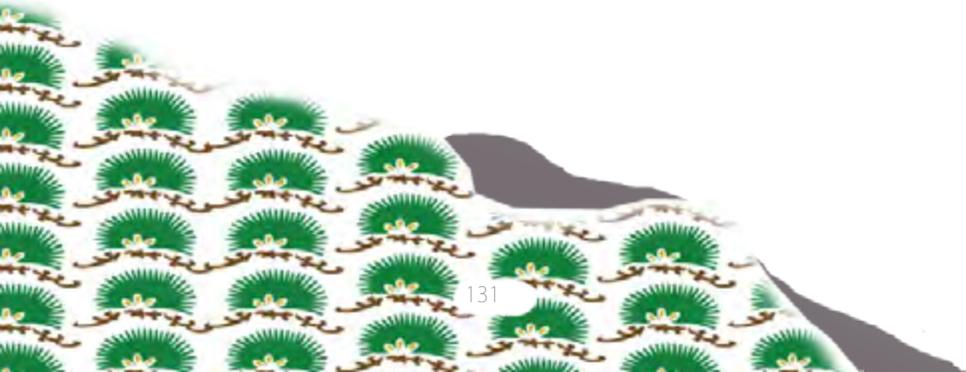
字幕のやう一言添ふる年賀状

どこへでもお行きと夫の春炬燵



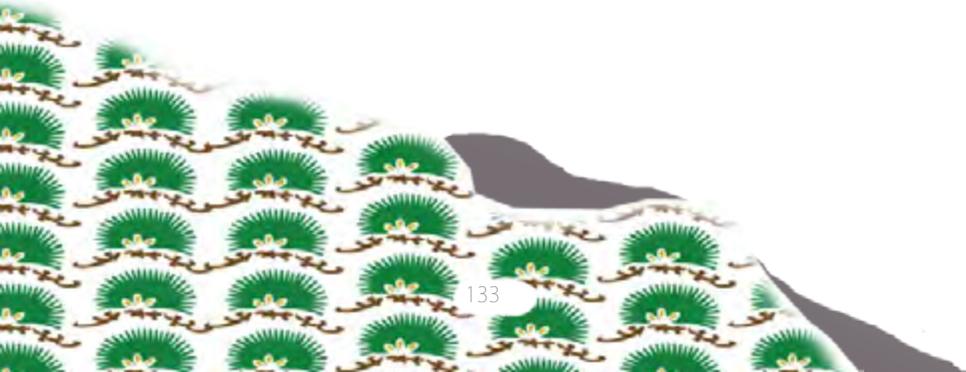
淑気かな富士にひとすぢ川光る

竜の玉夫婦茶碗を疑はず



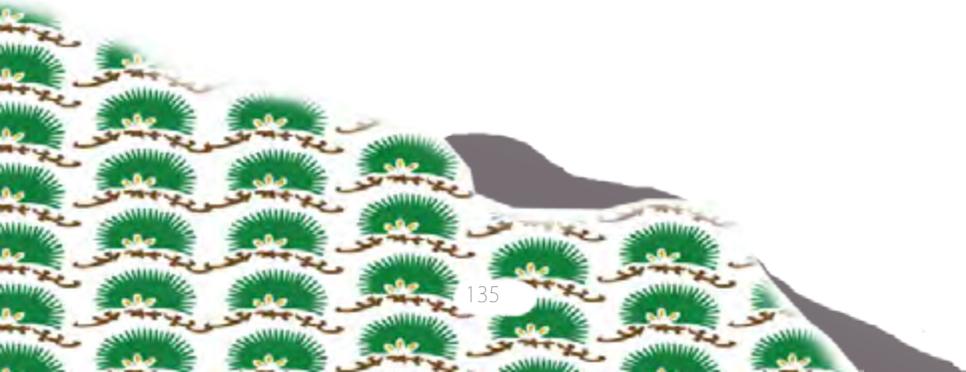
若者は仔鹿の目をして春を待つ

あでやかな弦のハバネラ凍月夜



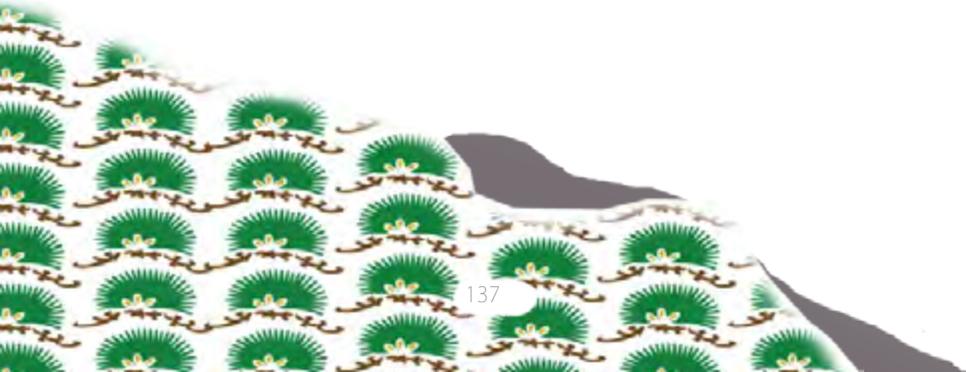
雪の果山古志中学建替る

ただいまとおかへりの日々柿若葉



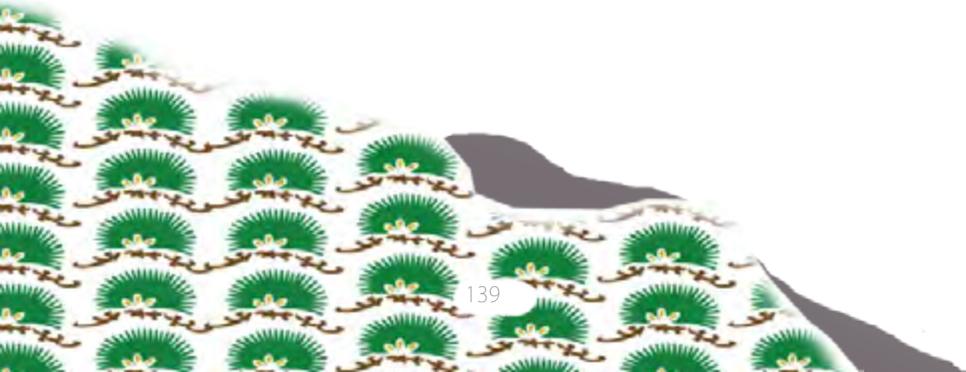
ほわほわとそよぐ土筆のセピア色

開ききる辛夷の花の高笑ひ



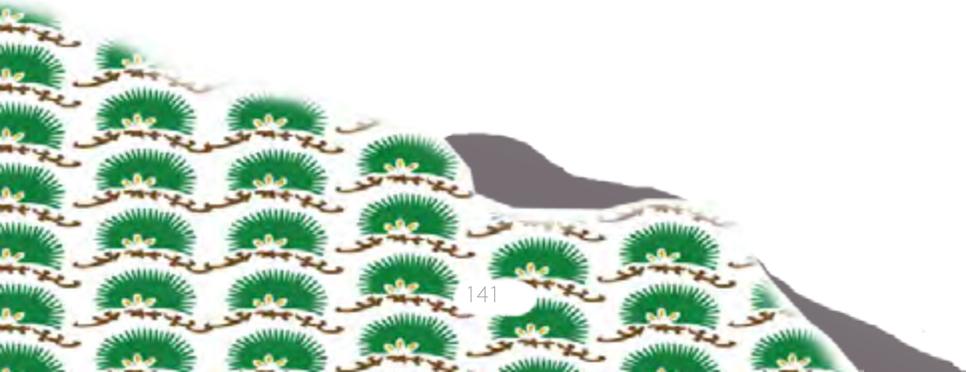
これはこれは交番前の五分桜

道草の好きなプードル花衣



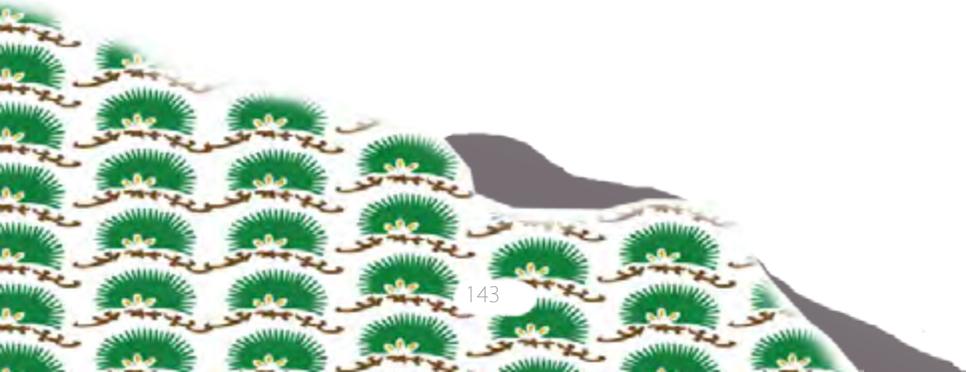
愛
ち
や
ん
も
さ
く
ら
も
藍
も
春
の
駒

新
塔
や
ソ
ワ
カ
と
唱
ふ
花
の
下



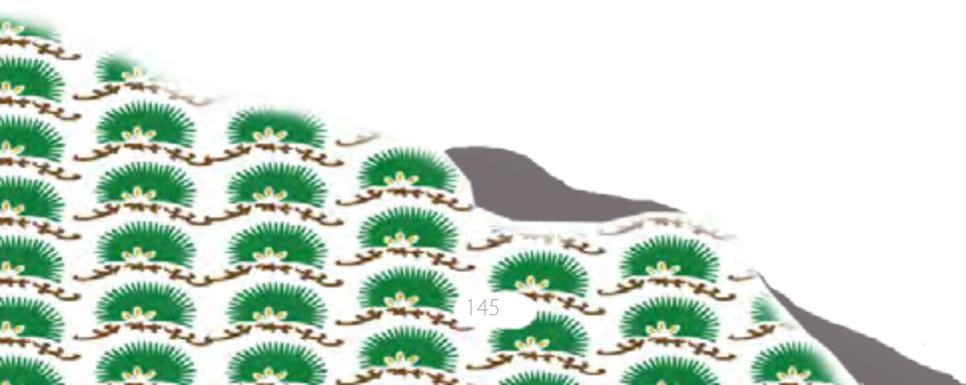
扇子仕立てうららにありて書道展

越後路は何処も落味噌味くらべ



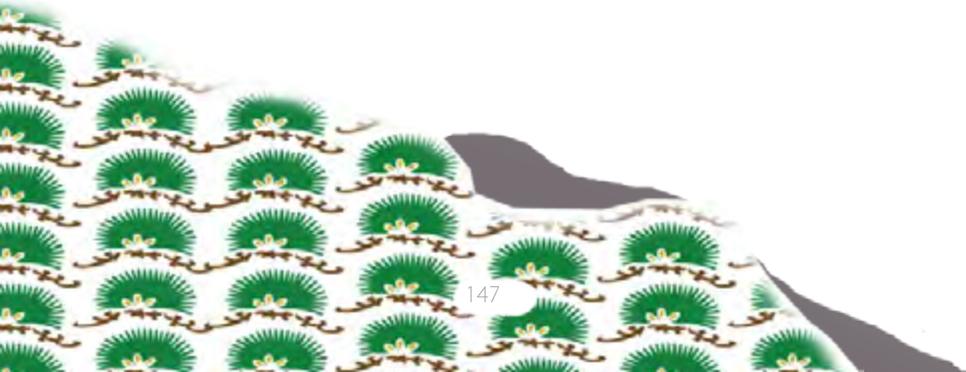
春暑し百鬼夜行と列車事故

繋がれし犬の目で追ふ落花かな



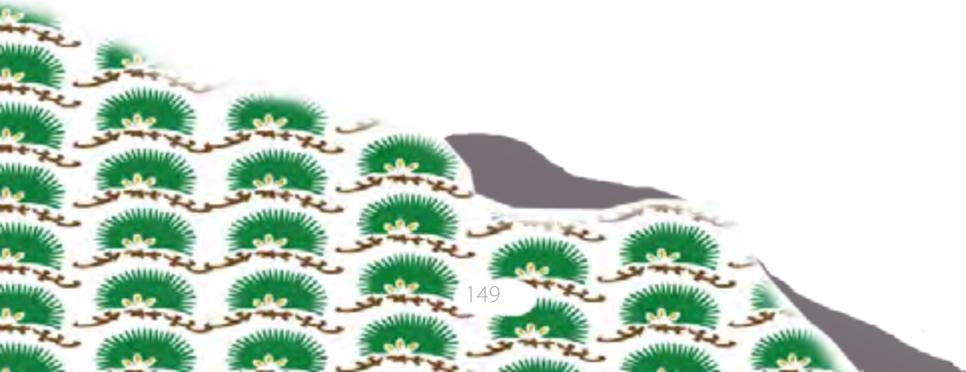
読み返す訃報フアックス洗ひ髪

ほたる火や酔ひては傘をさがす人



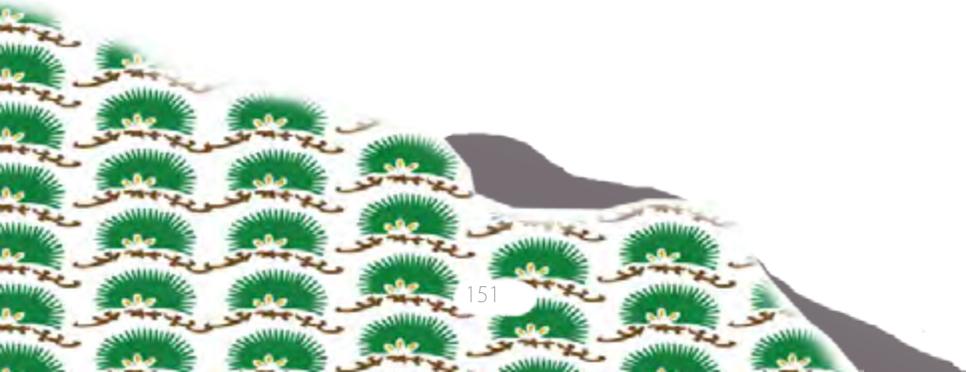
体力より頭脳の勝負リラ終る

訛りにもぬくもりありてさくらんぼ



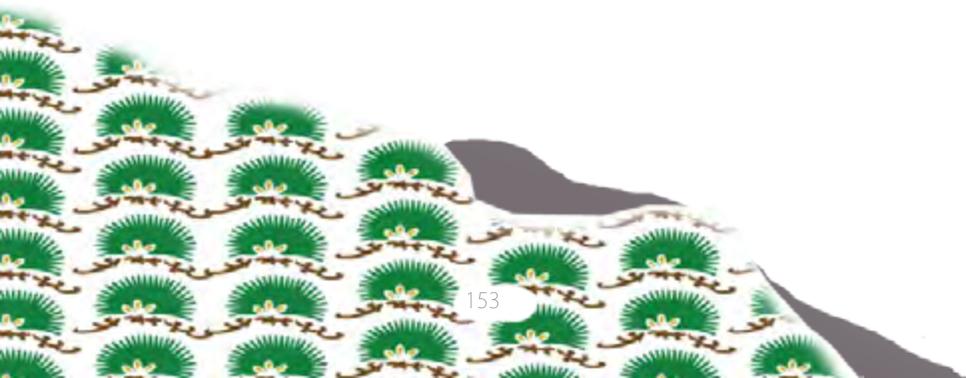
滝の糸啄みに来る背黒鳥

改装の居間横切れる白き蛇



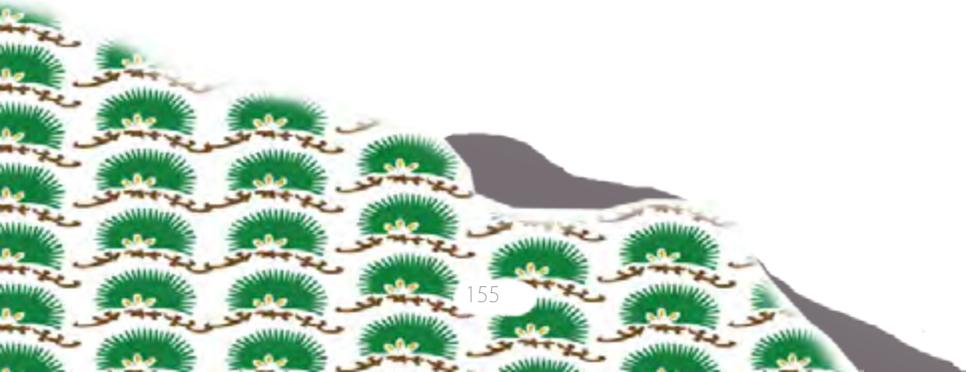
待ちし甲斐ありて二重の虹の橋

雨上り葛の花色まがまし



隼
人
瓜
漬
物
如
何
棧
敷
席

音
つ
む
ぐ
龍
君
の
笑
み
秋
桜

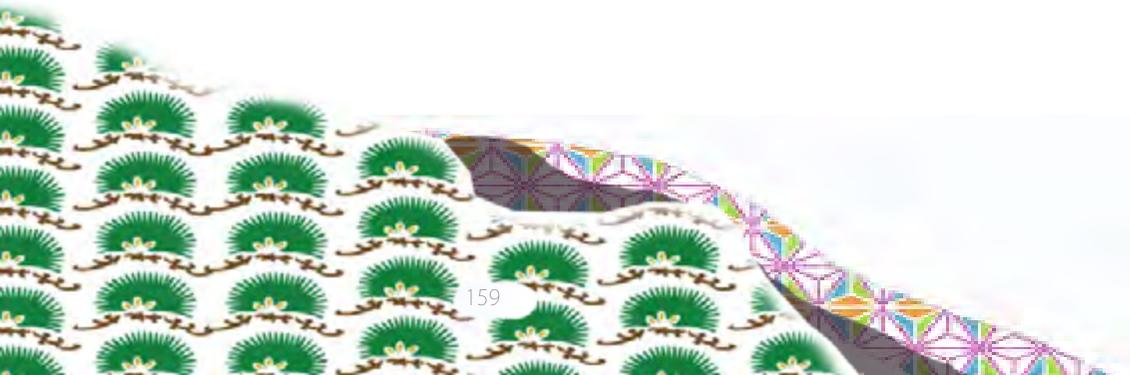




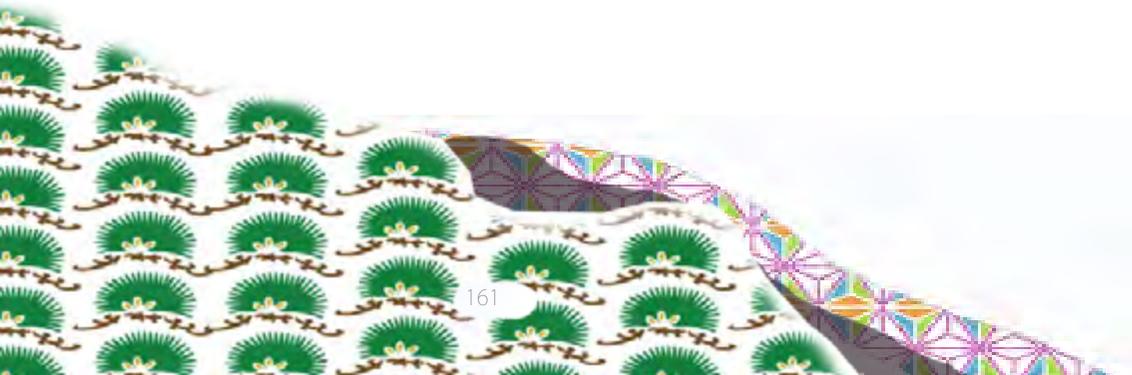
3

2006 ~ 2010

庭
先
の
軽
き
諍
ひ
小
六
月



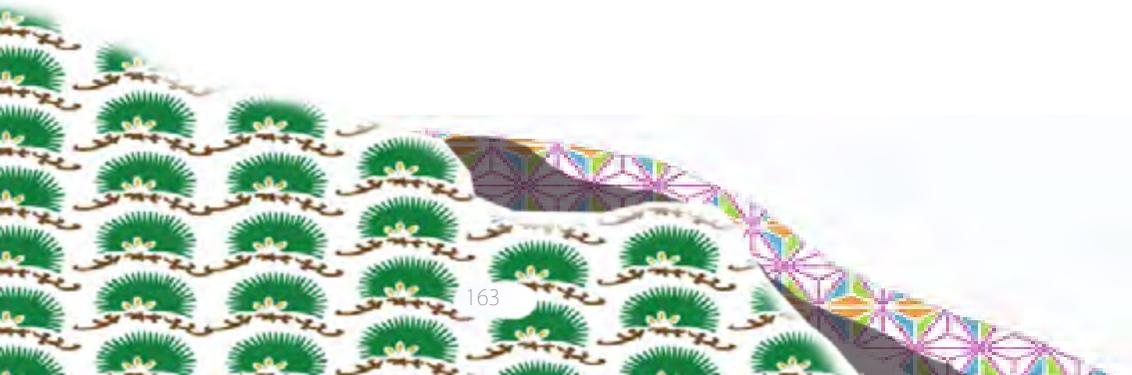
縁
取
の
追
羽
根
め
け
る
姫
椿



枇
杷
の
花
ち
あ
き
な
お
み
の
フ
ア
ド
を
聴
く

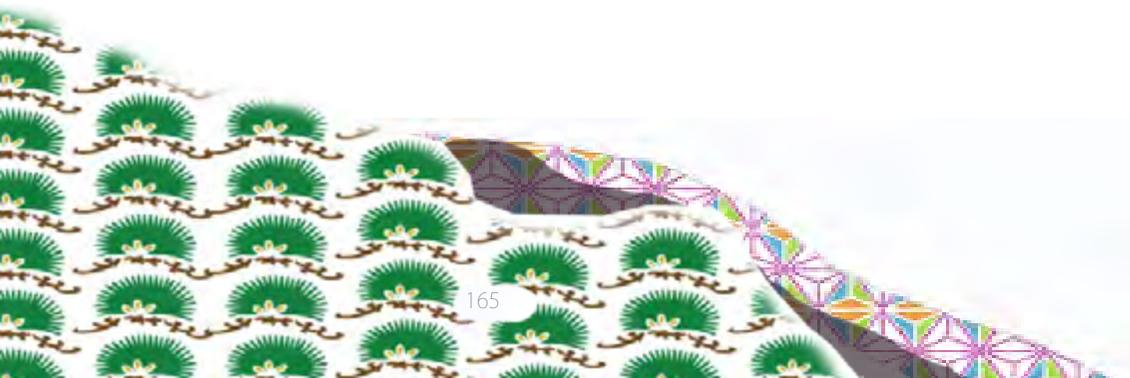
十二月八日と暫しむかひあふ

テーブルブレード炬燵の猫をまづ下ろす



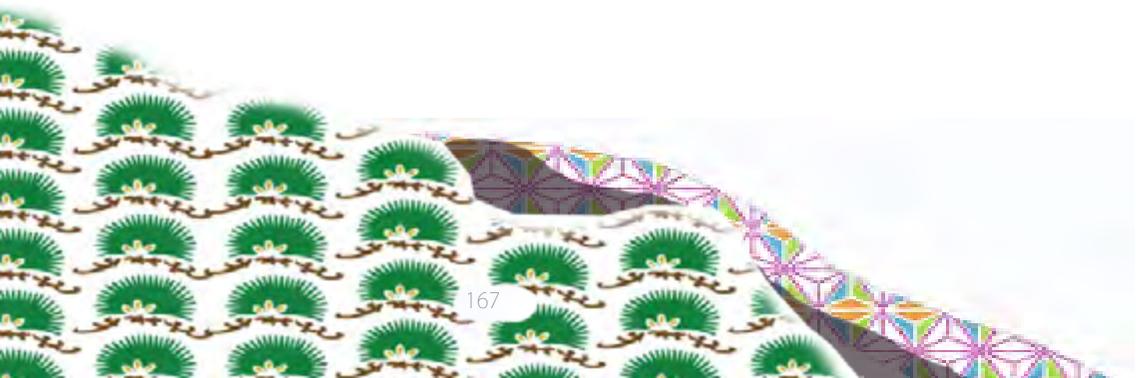
ど
ぜ
う
鍋
葱
の
あ
ふ
る
る
薬
味
箱

礼
言
ひ
し
声
の
若
さ
よ
寒
の
僧



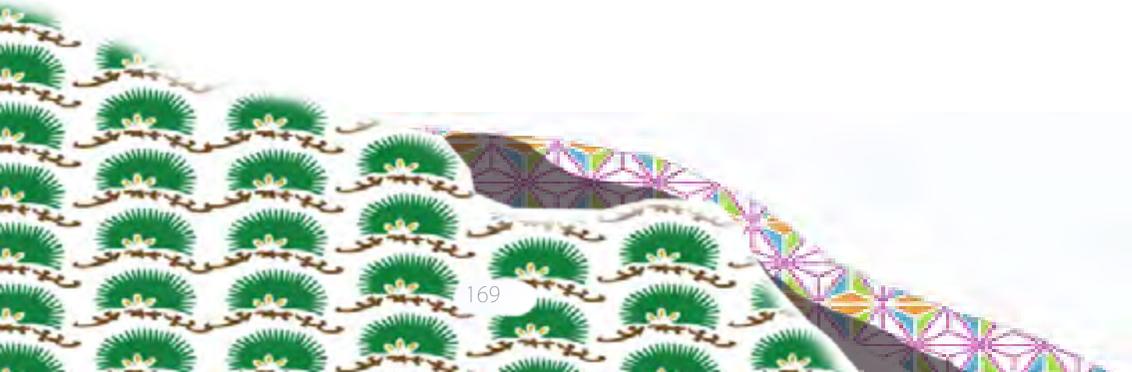
掛雛や鼻緒すげゐる半跣蹴坐

風花を見てゐる人を眺めをり



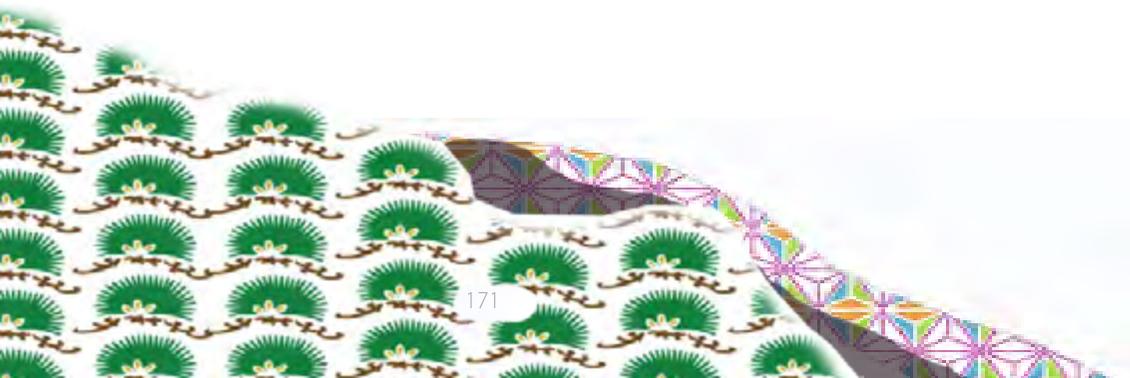
三
極
や
宿
に
機
転
の
利
く
娘

囀
や
小
上
が
り
に
充
つ
食
べ
ざ
か
り



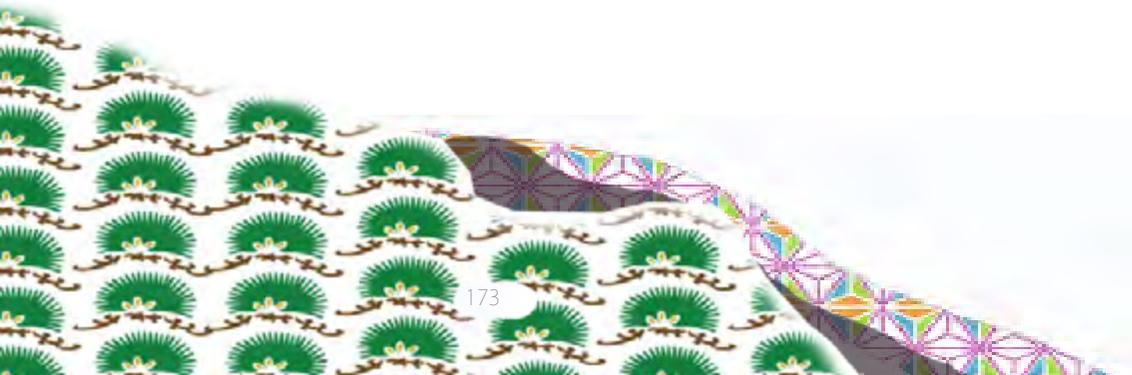
大切な人攫ひけり春の風

朧夜や時代遅れと言はれても

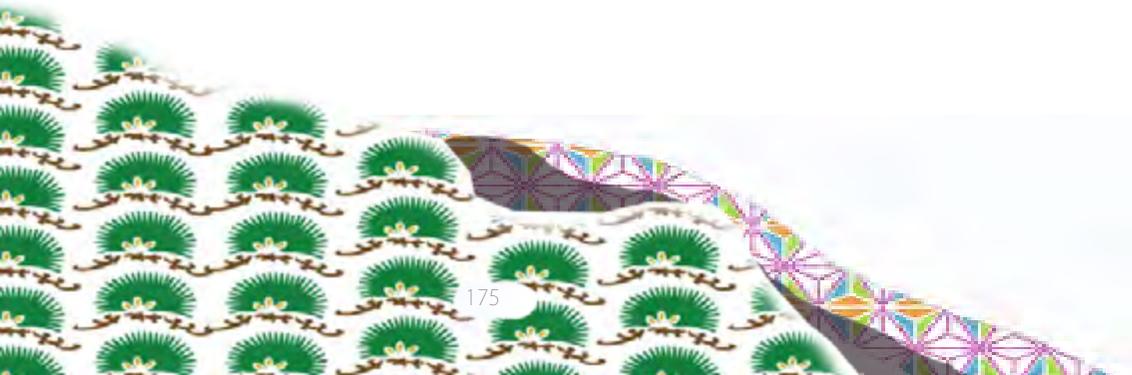


山菜蕨の黄に静けさの満ちてをり

菖蒲の湯母に初めて聞く話

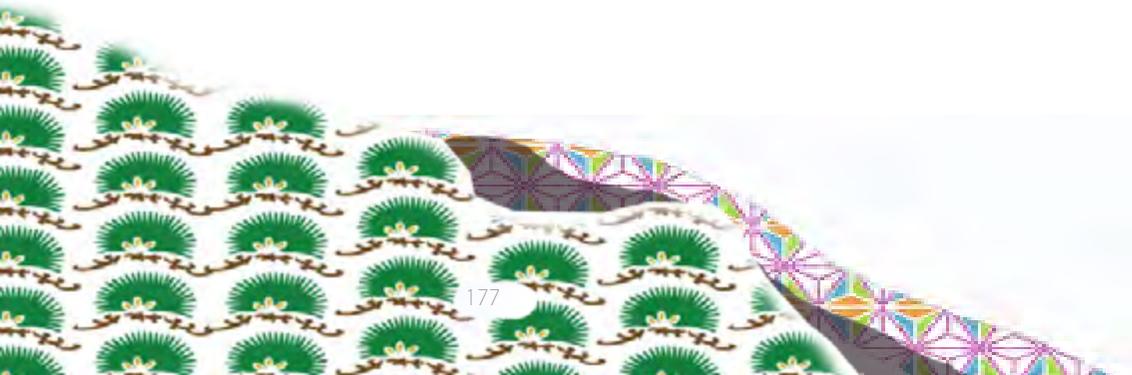


晩
夏
光
敗
者
の
直
す
靴
の
紐



雷
鳴
の
度
鯖
色
の
空
歪
む

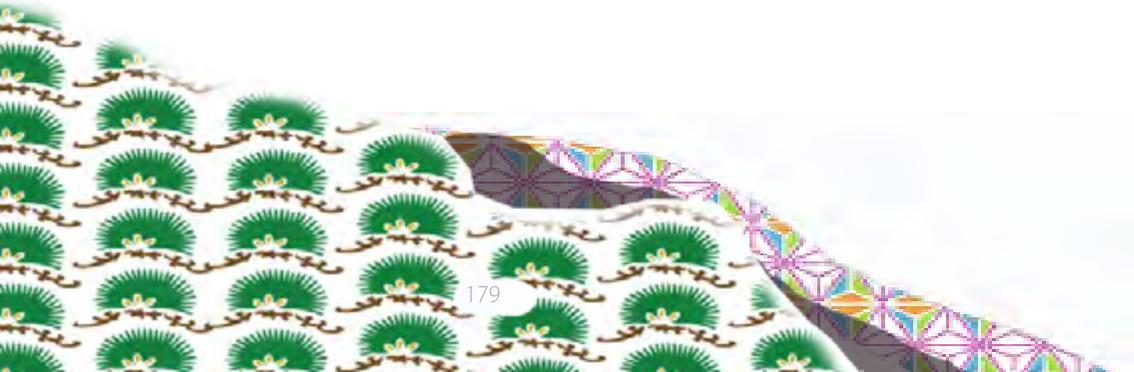
豪
州
の
翡
翠
す
こ
し
下
膨
れ



吊
橋
の
人
に
岩
魚
の
押
合
へ
る

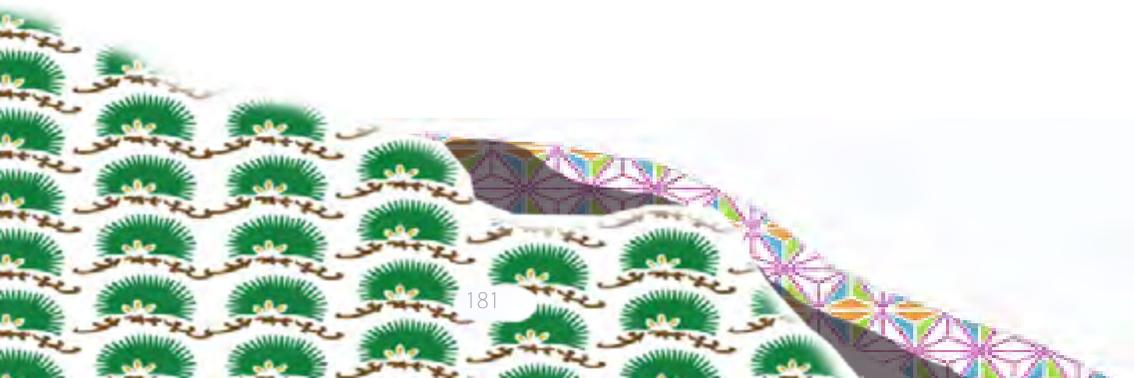
小枕ほどの冬瓜を買ふ道の駅

全試合後逸せずに夏天終ゆ



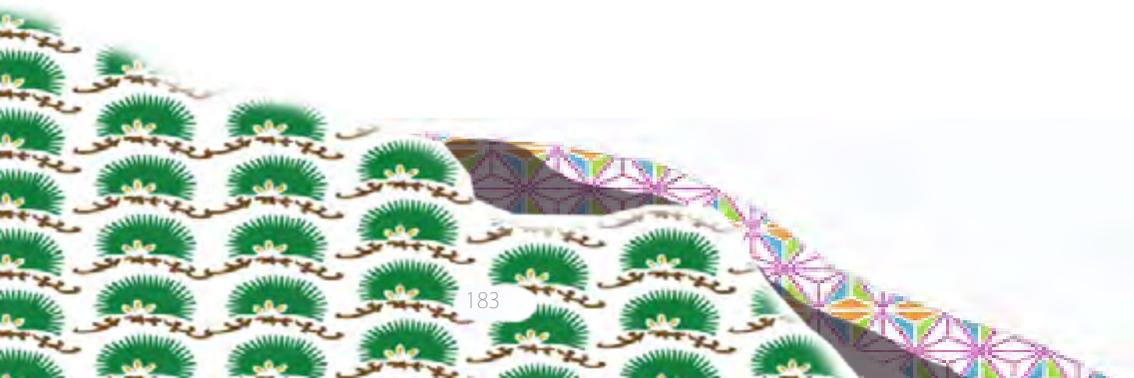
余生とはいつからならむ小豆煮る

コーヒーはきりりとトラジャ鰯雲



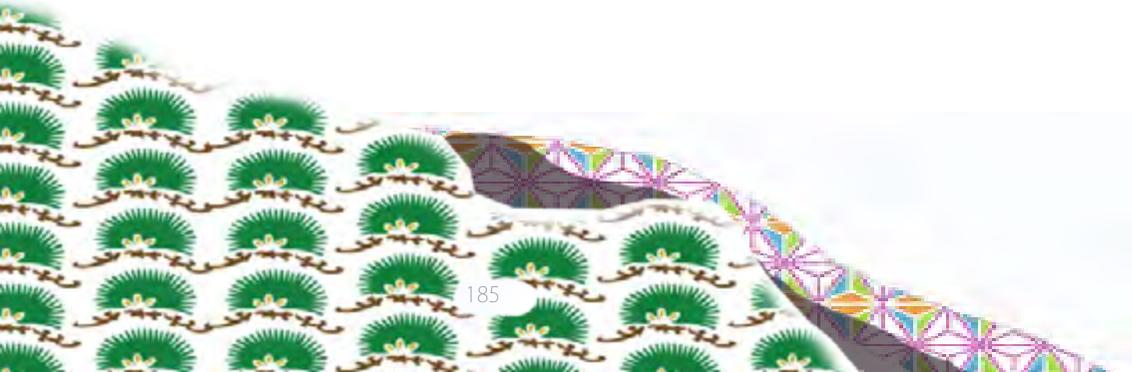
駆
去
り
し
人
へ
問
ひ
た
き
墓
参

八
十
八
階
ビル
の
足
元
石
路
の
苑

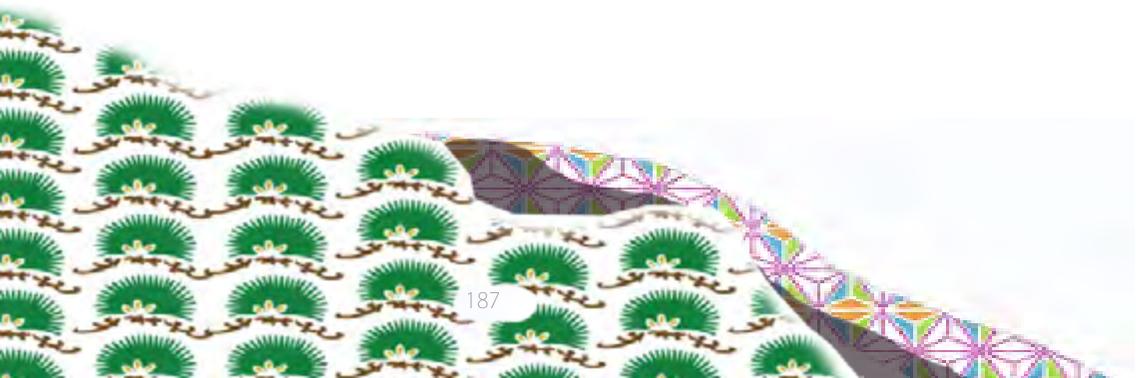


片時雨近近と読む壁新聞

着ぶくれし幼児の通る磨硝子



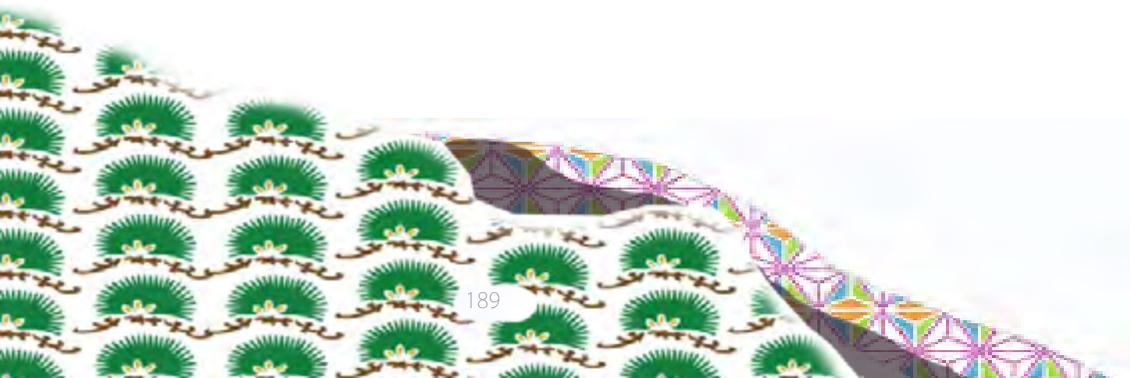
春陰や二十日鼠の休みなく



冬蠅の無重力めく折返し

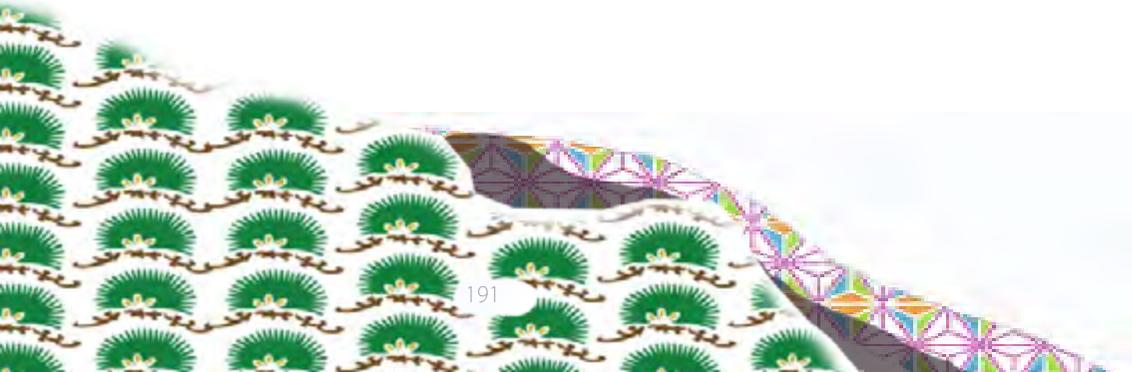
島風の澄切つてをり鹿尾菜生ふ

亜麻色の産毛まとひし春の露



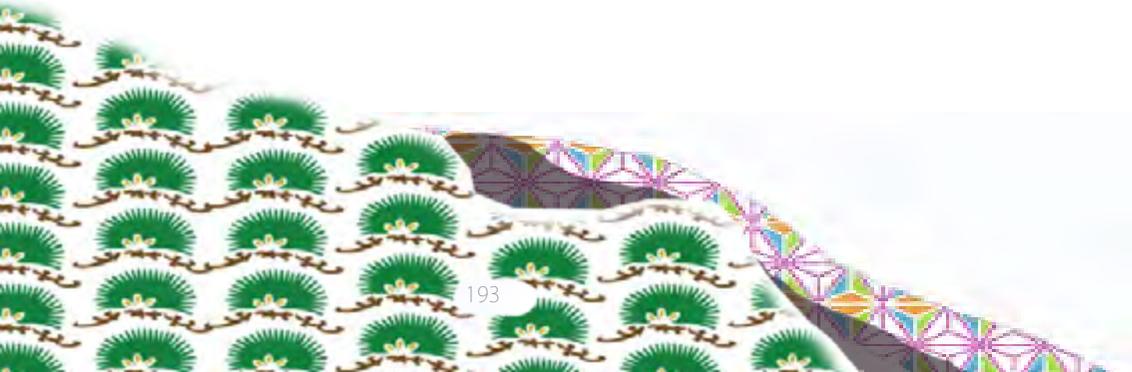
花あせび乾切つたる手水鉢

囀の途切れるあたり投票所



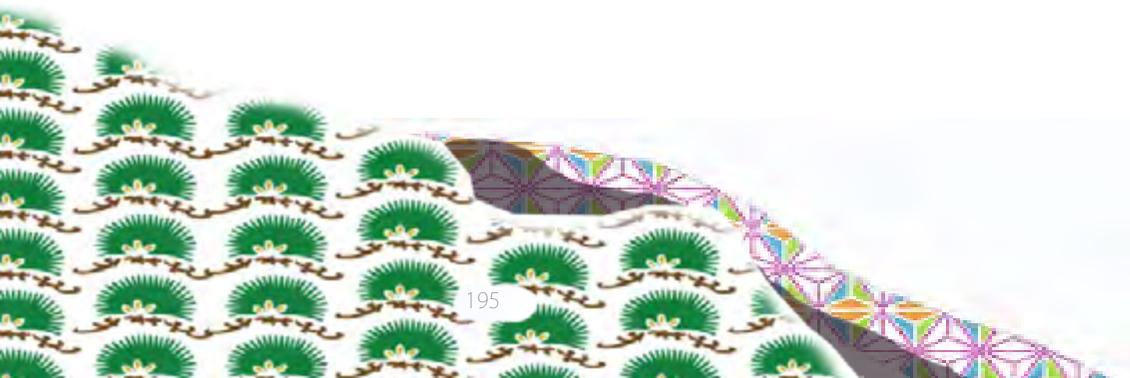
きみもずいぶん飲みましたねと桜餅

春燈や身軽になりし広辞苑



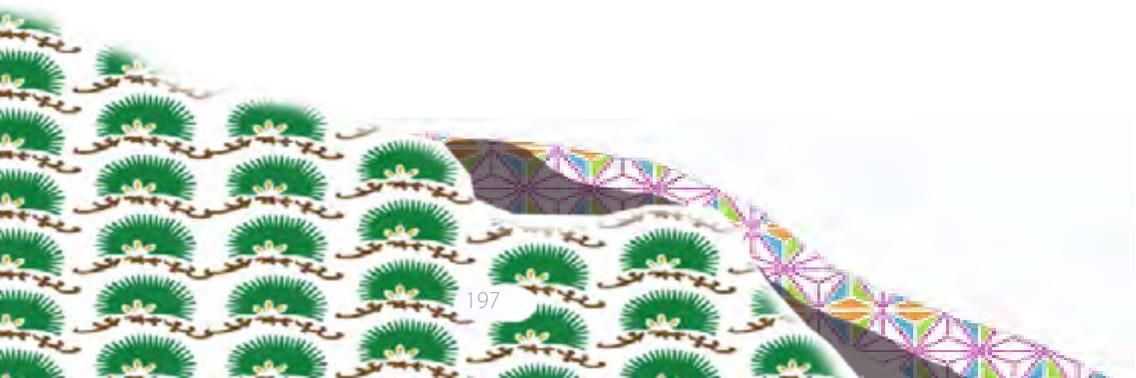
常常の向う側なる夕端居

左手はいつも不器用鉄線花



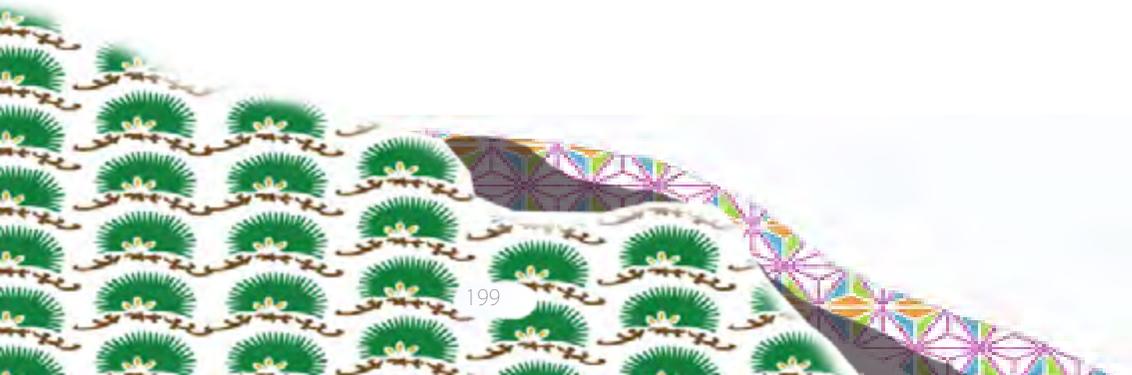
春の宵入れ子人形黒目勝ち

大西日王者のミスに響動きぬ



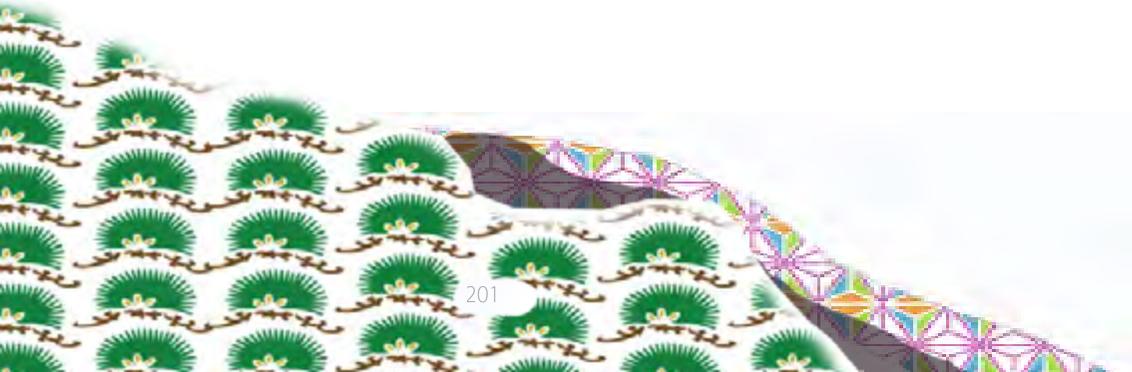
紫陽花をひらがなで書く日記かな

縄文のビーナスに会ふ巴里祭



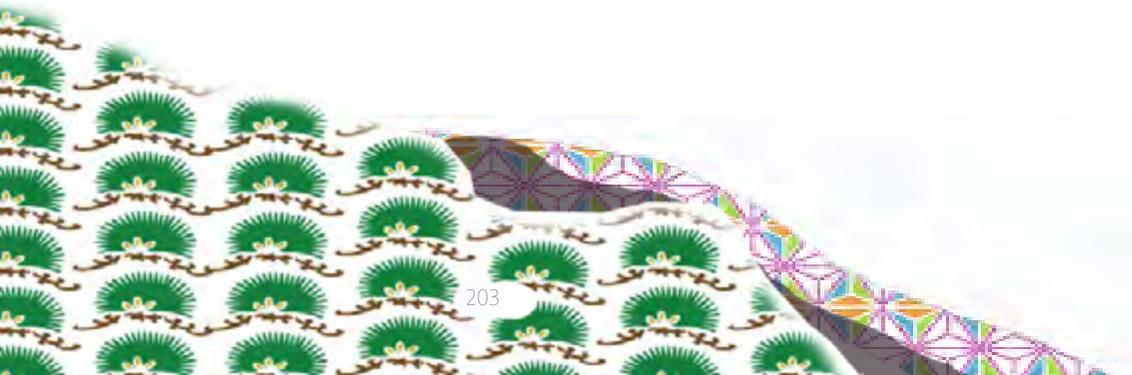
八朔や阿久悠硬派全うす

曾遊の地にて確かむ檀の実



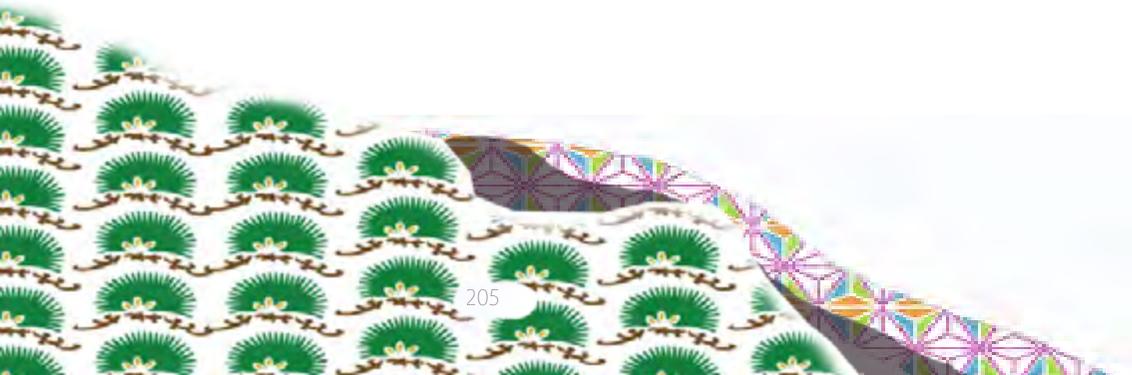
おむすびの新海苔の香も夜行バス

やはらかな訛と巡る冬の加賀

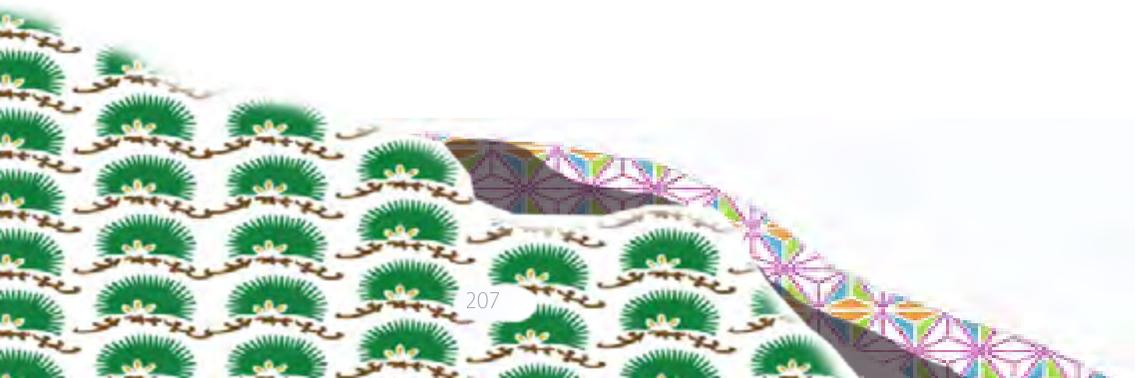


飛石に雨染渡る暮の冬

富士眺む湯治の母の冬立つ日



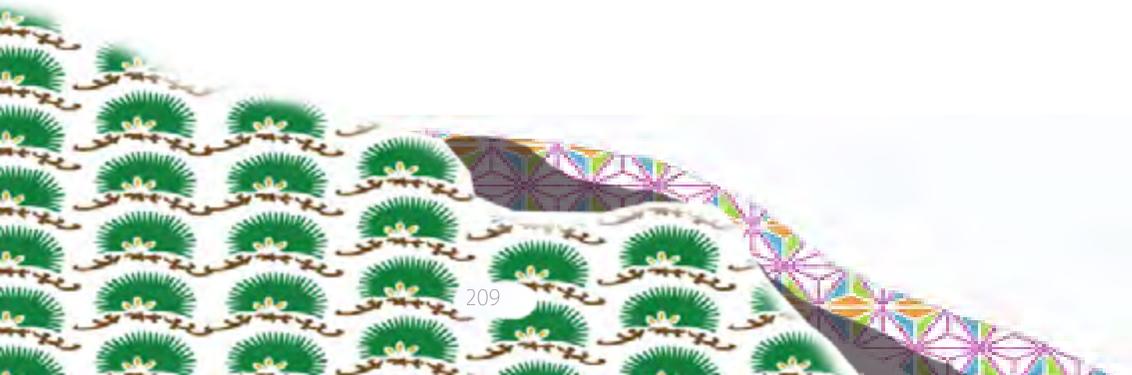
外山雄三何十万回目かの礼



フアゴットの紅の美し春隣

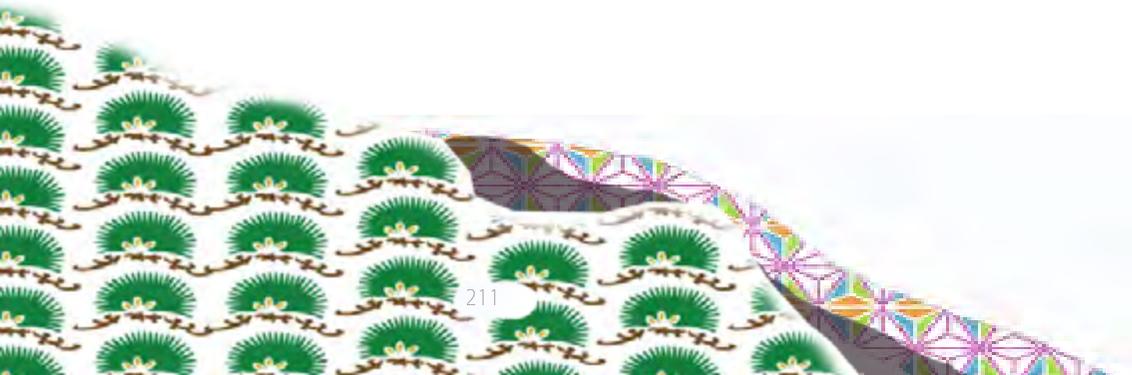
三戸の漢の薄着星冴える

年酒とて「どんべり」といふ濁酒



歌姫のピアフ時には毛糸編む

三極の花の丹頂突く子あり

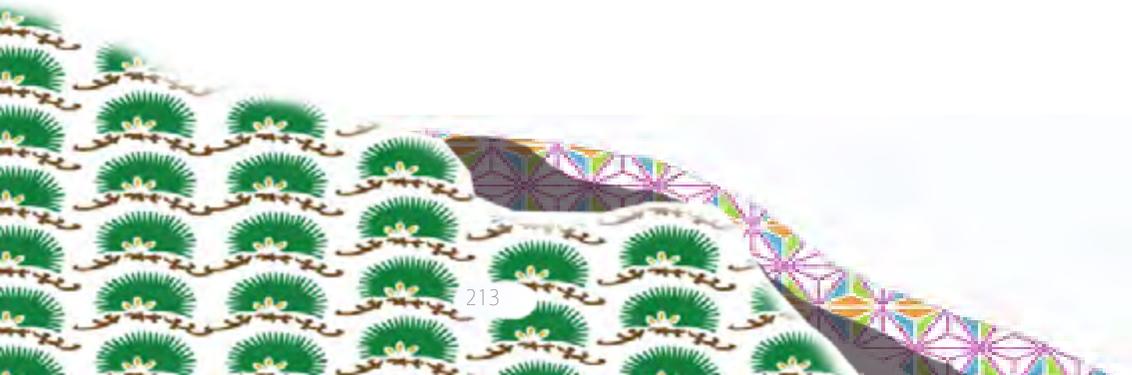


龍之介の嘆きたる坂春埃

212

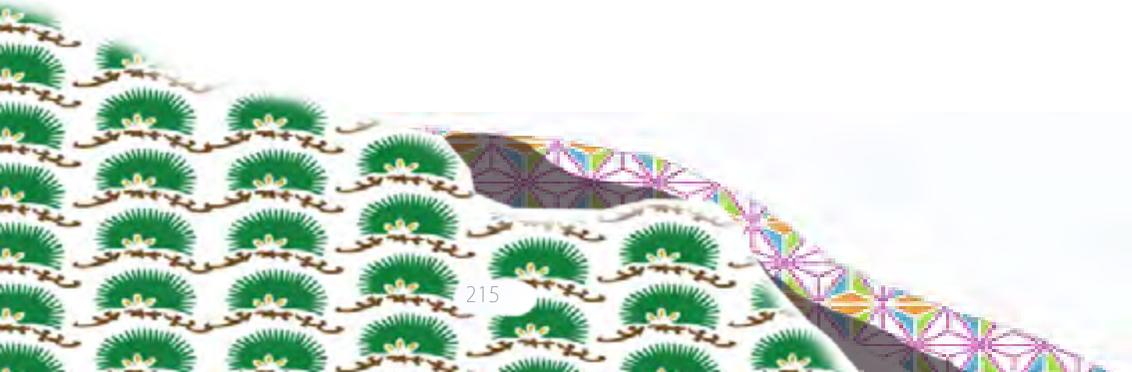
乳母車時折裸足跳ねてをり

213



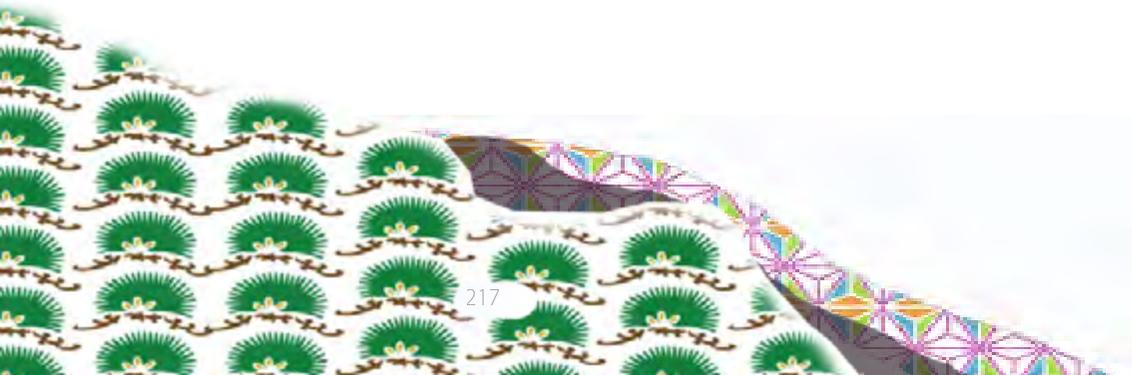
雨上る凌霄の花上向けり

青柿の下だだっ子の言募る



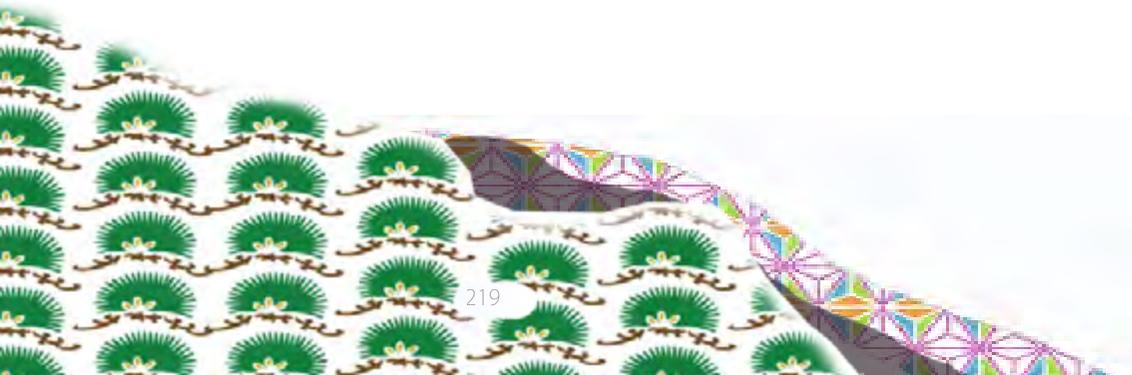
ご近所も立働きて梅雨晴間

空を指す柏葉紫陽花
弘子めく

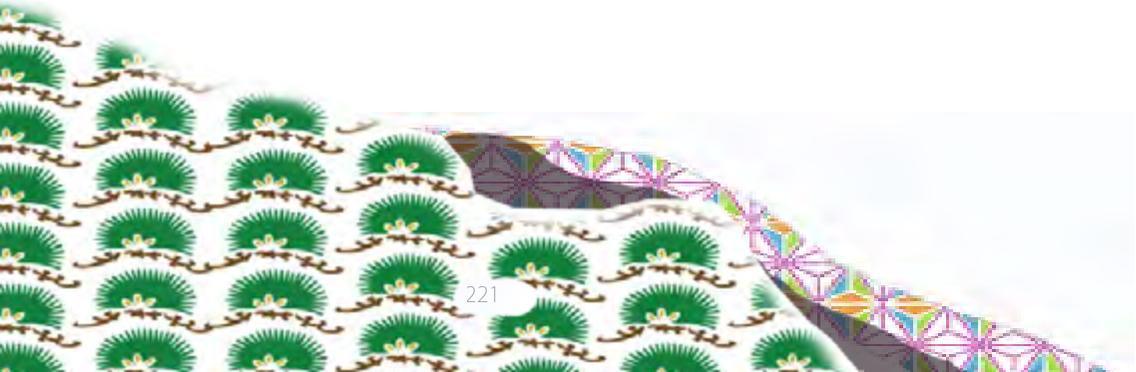


寄植に馴染んでをらず吾亦紅

ゲリラ豪雨と呼ばれしほどの秋出水



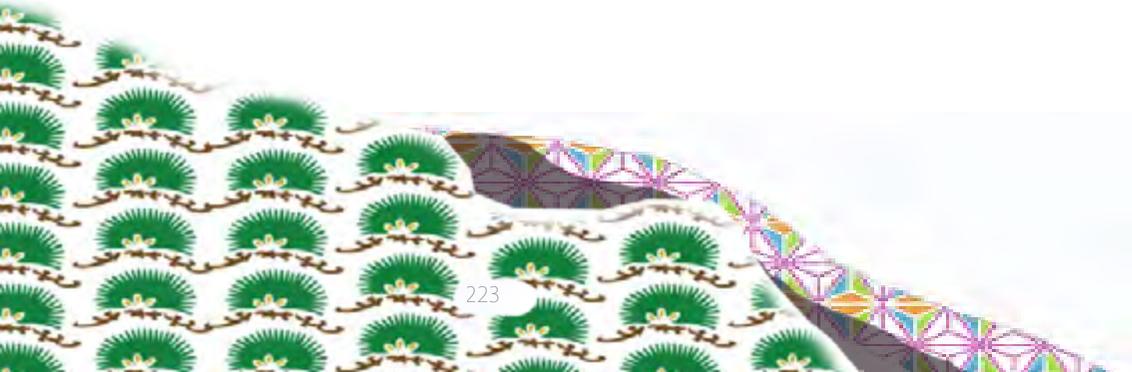
良妻も賢母も難し寒卵



初秋刀魚鮨屋の背の丸くなり

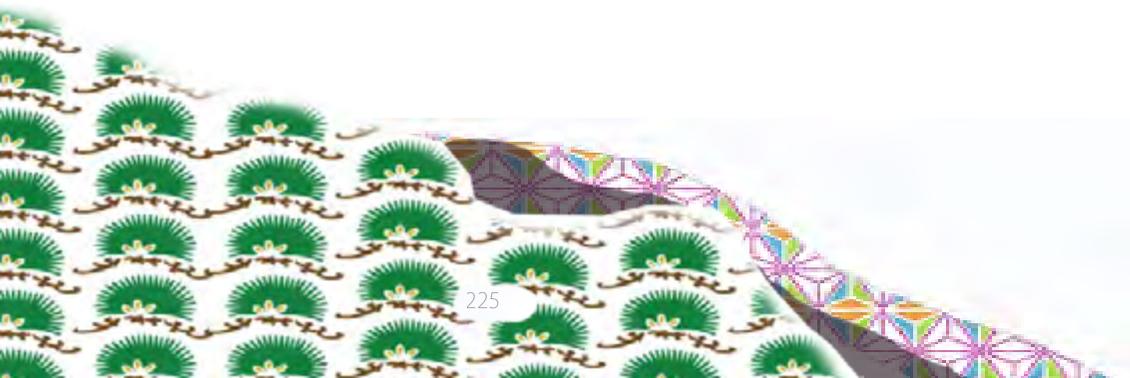
北吹きて円了旧居靈界に

スメタナの我が祖国聞く宵の年

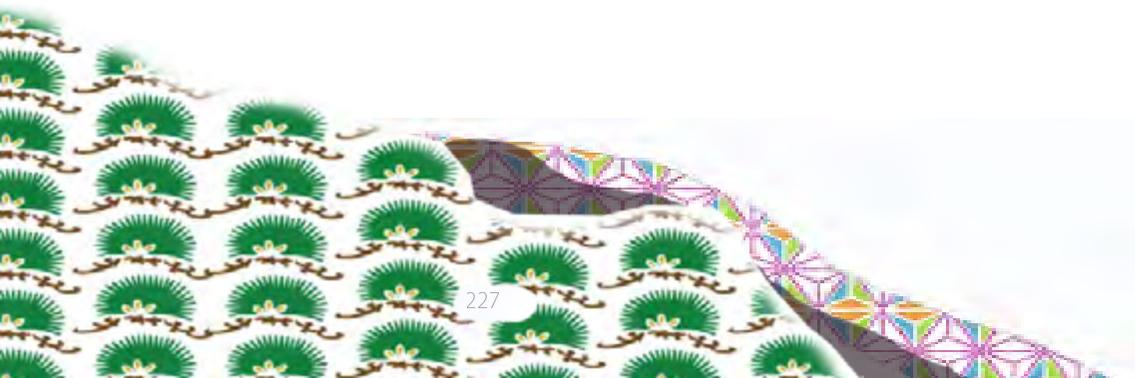


傘
寿
で
す
今
年
限
り
と
年
賀
状

無
器
用
な
ま
ま
の
父
と
子
路
の
た
う



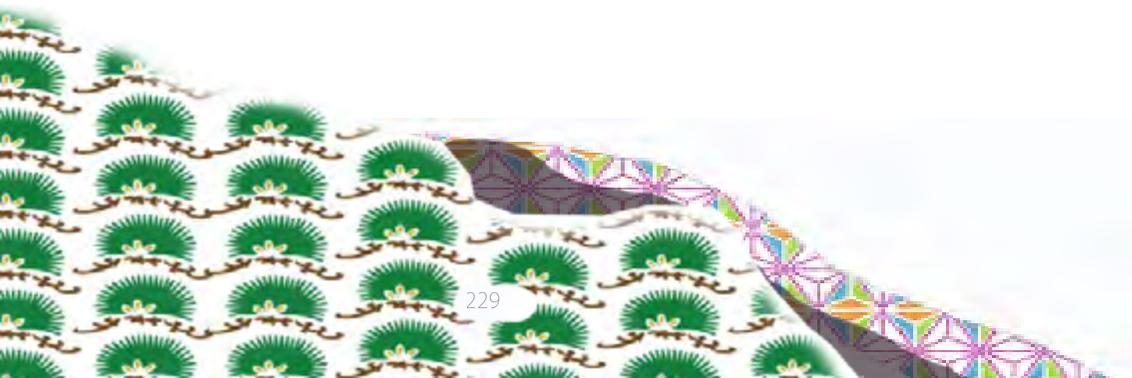
珊瑚礁隆起せし島春闌ける



ころころと笑ひし頃の桜貝

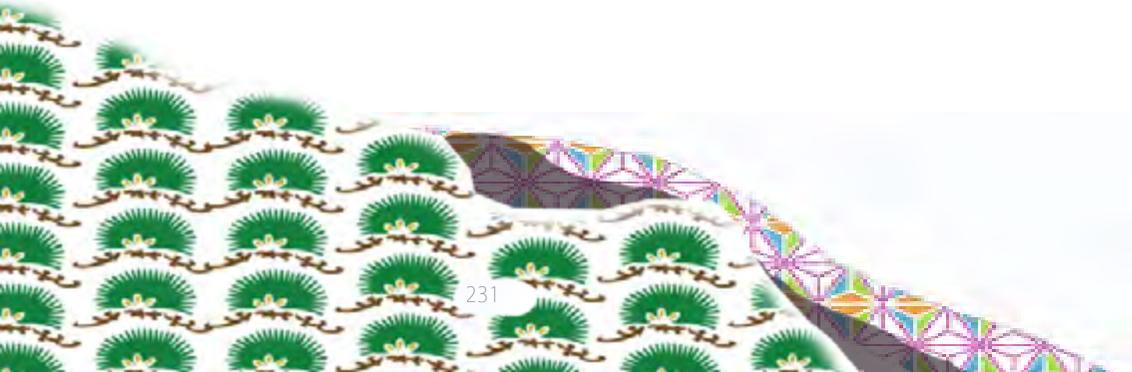
菜の花黄さとうきび畑ふちどりぬ

まっすぐに歩かぬ子供春の浜



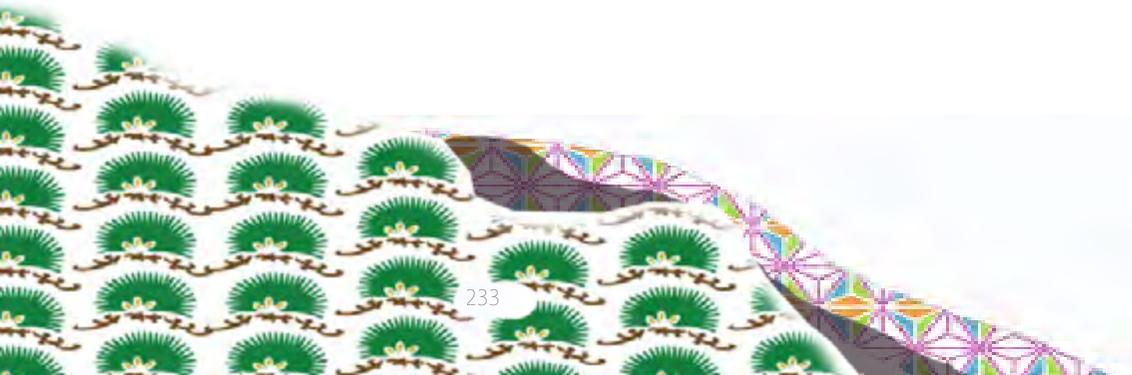
黒糖焼酎いかほど飲めば島人に

棹さしの胸板厚し春闌ける

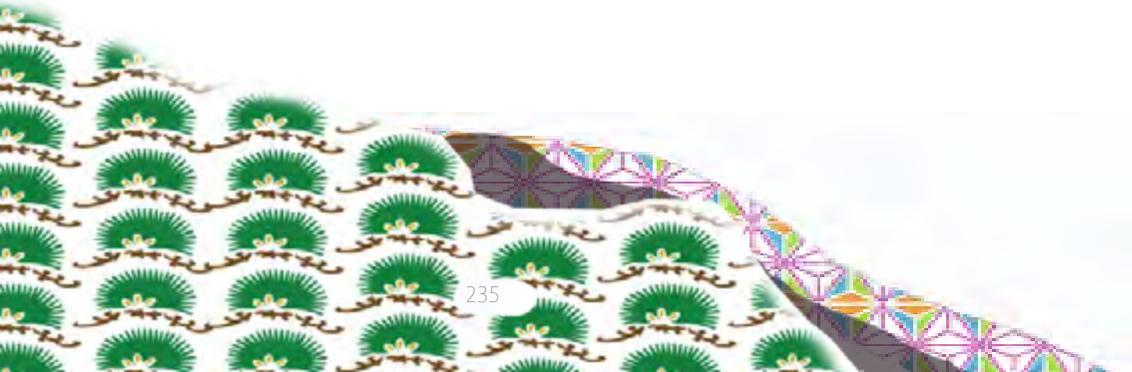


鉄橋にトロツコ電車山桜

花の中春シヨールして義母の笑む

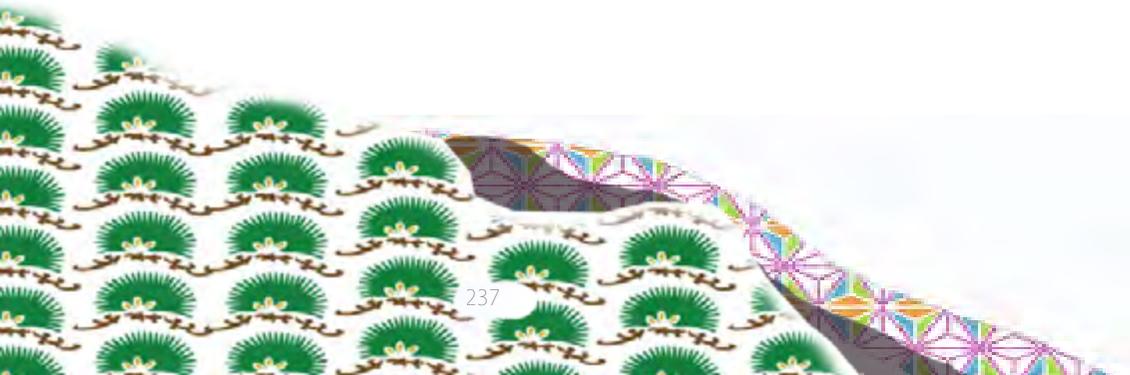


ど
の
猫
も
黒
猫
と
な
る
朧
月



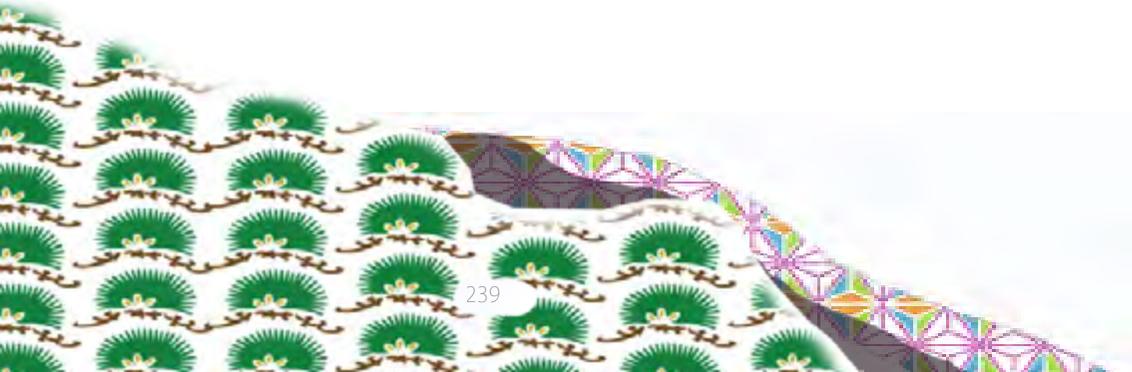
い
く
た
び
も
風
乗
換
へ
る
紋
白
蝶

水
槽
を
真
横
に
鮓
の
朱
き
腹



高
層
に
回
収
車
の
声
遅
桜

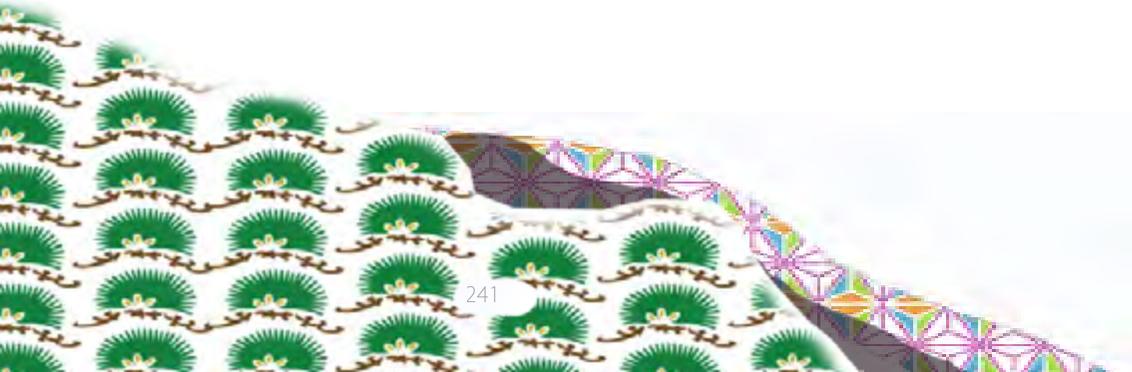
籐
座
椅子
子
八
海
山
麓
蕎
麦
処



ぬ
ひ
ぐる
みに
キ
ウ
イ
加
は
り
五
目
鮨

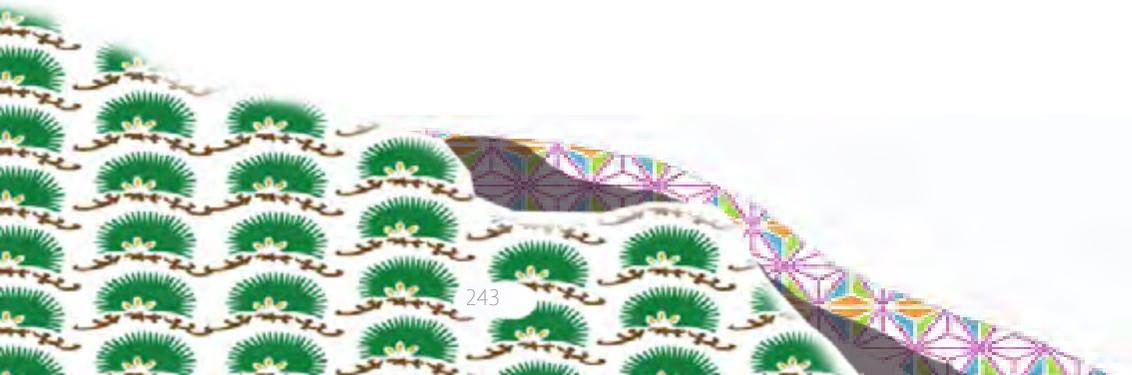
梅雨茸や日々の見出しの虚仮威し

菖蒲園気高きまでの白ありて

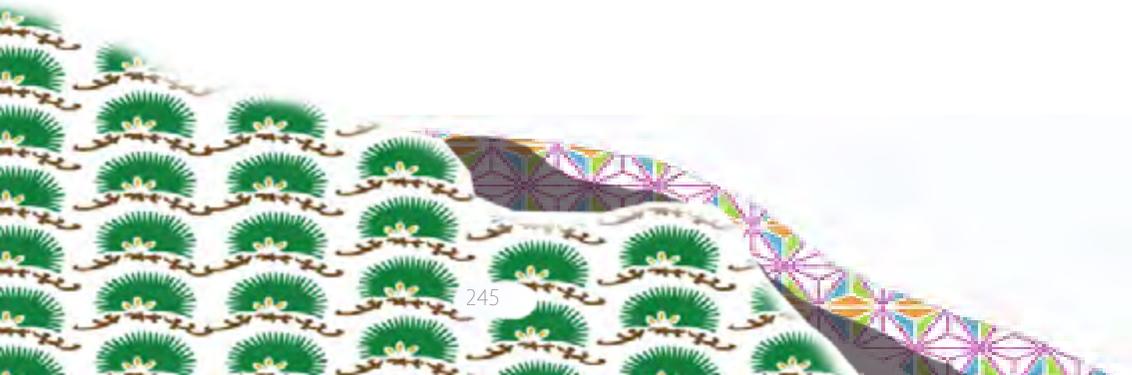


雛に添ふ菊花真綿に包まれて

何処行くの遠くから声秋晴るる

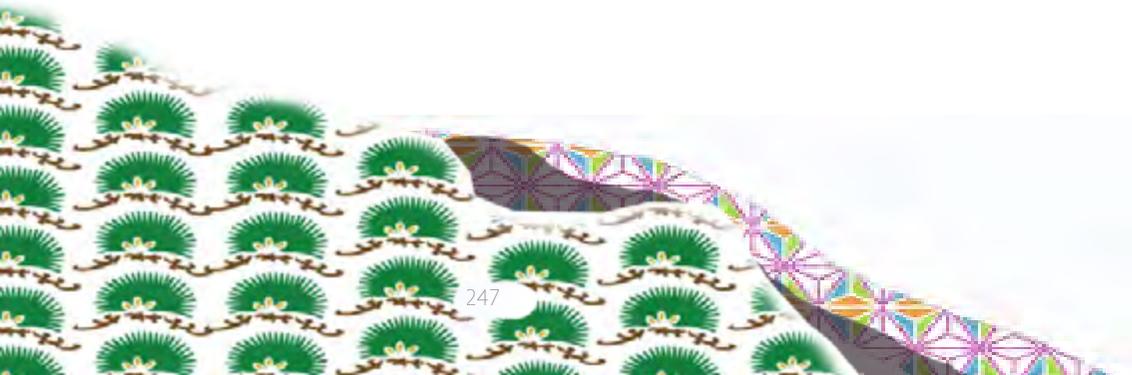


芋
嵐
出
足
の
速
き
投
票
日



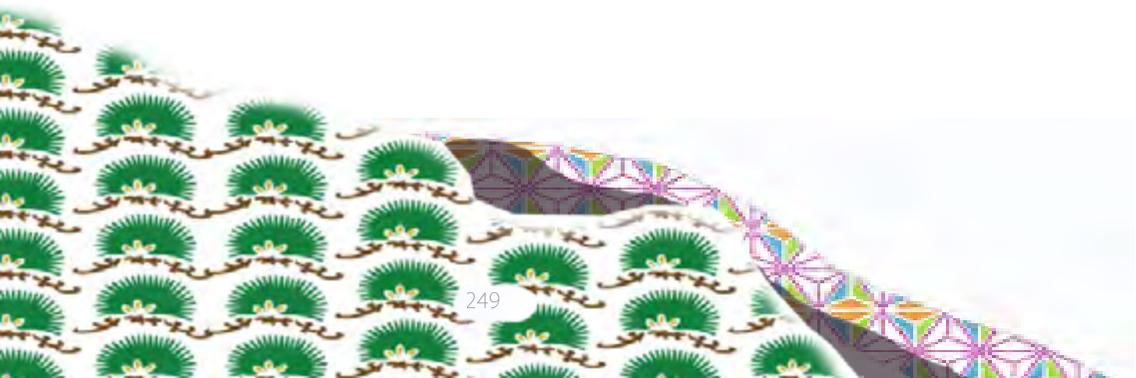
赤
ち
ゃ
ん
に
笑
ひ
か
け
ら
る
秋
日
和

秋
彼岸
入谷
に残る
鯉節
屋



萩
揺れる
坂は
変らぬ
麻布
かな

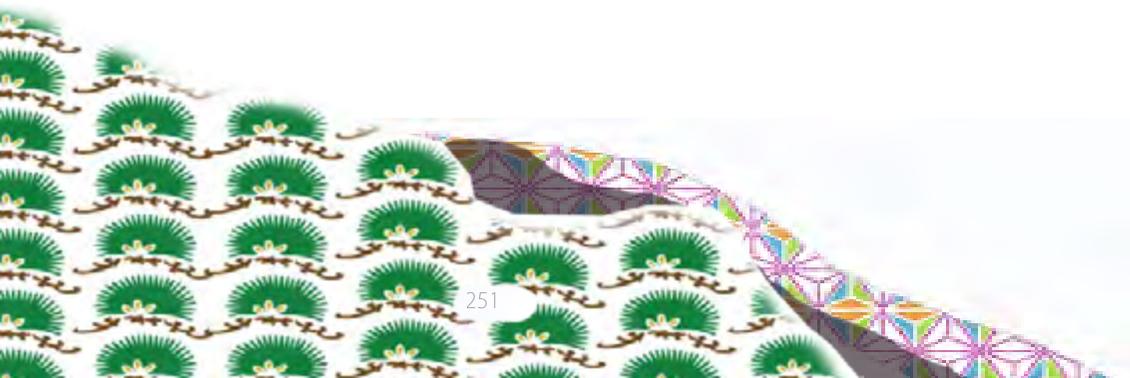
緩やかに山みづからの冬構



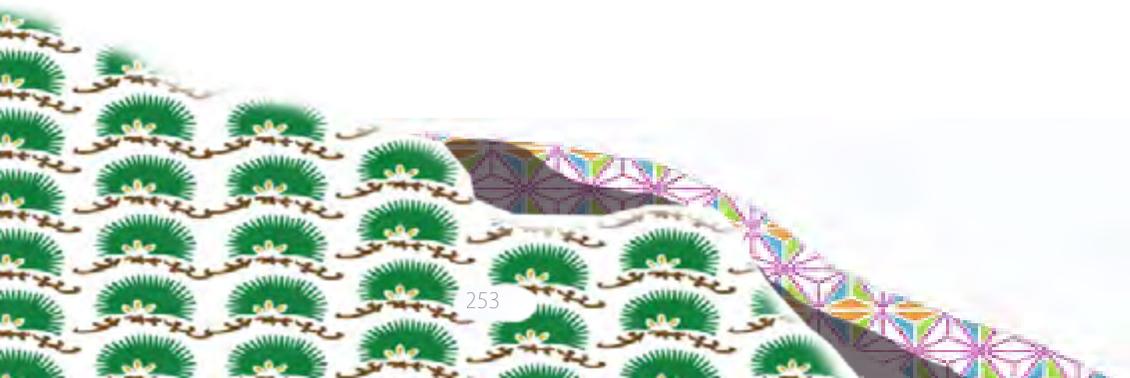
赤城山麓“シャローム”という林檎園

指銜ふ児を抱く羅漢小六月

寺巡り花を愛でたる波郷の忌

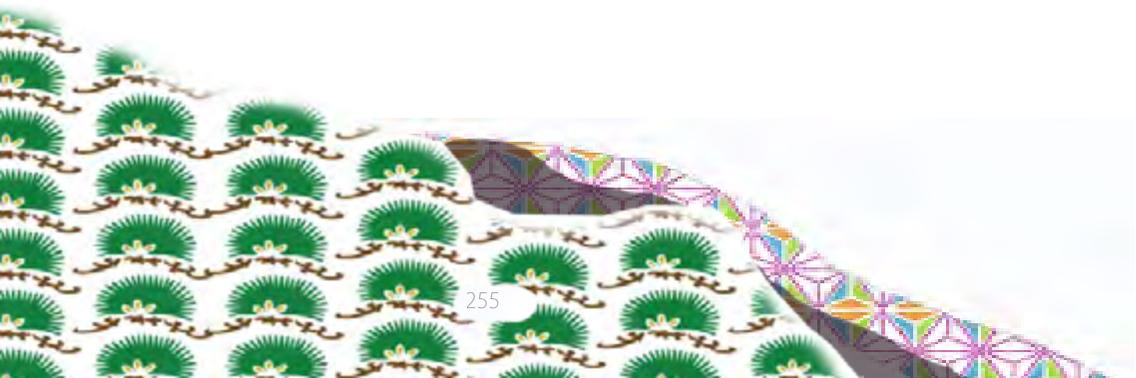


晴
渡
る
畝
に
残
れ
る
霜
の
粒



平
ら
か
に
暮
す
勁
さ
や
福
寿
草

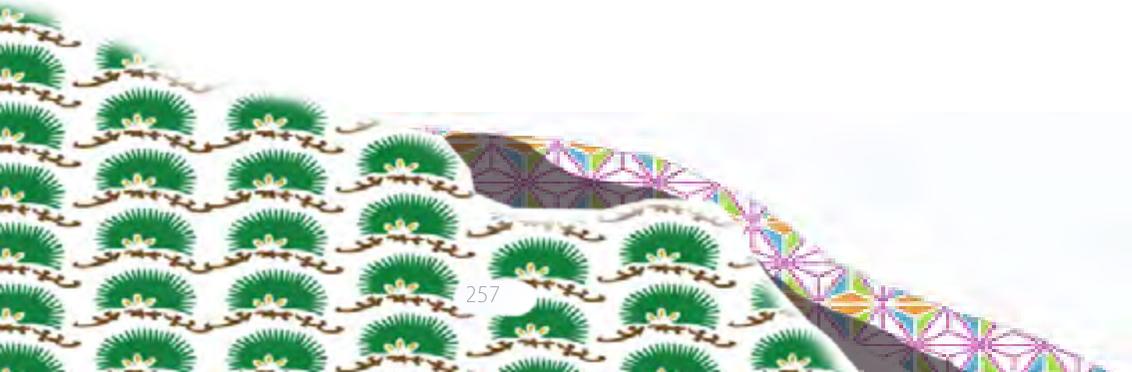
丘陵が地平線のやう冬夕焼



十二月八日花屋に並ぶ人

春眠にハッピーエンドの余韻あり

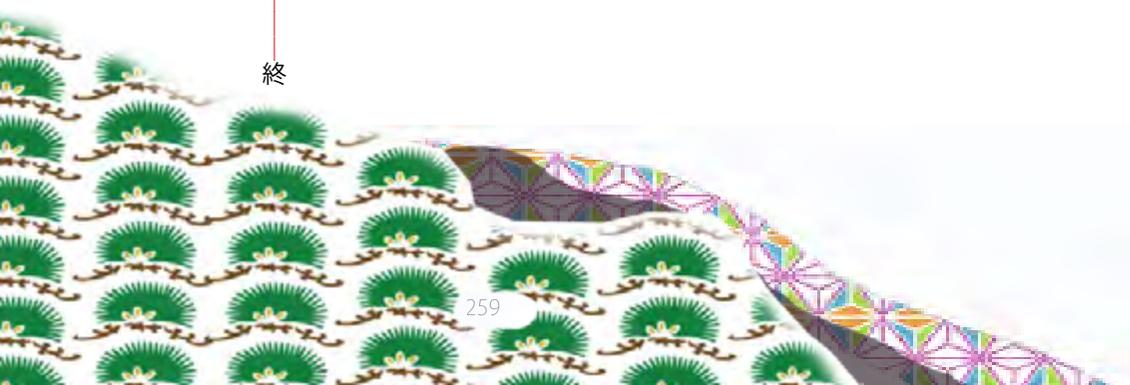
雪掻きの手を止め雪の話から



ぷるぷると紅震はせつ雉子の飛ぶ

桜鯛淡路流なる厚作り

ラムネ菓子
終





あを叢書 1

著者 赤座典子

発行日 2010年9月19日

発行人 佐藤喜孝

装丁 佐藤喜孝

発行所 竹僊房

〒164-0011 東京都中野区中央2-50-3

電話 03-3371-4623

haisi@kagoya.net

あを叢書について

二〇〇一年創刊の「あを」は今年で十周年を迎えました。これを記念してあを叢書とし電子出版することにいたしました。

この叢書はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。